

令和5年度（第62回）農林水産祭
第36回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸「百姓百品」】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時 令和6年2月28日（水）13時30分～16時00分
場所 愛媛県松山市 ANAクラウンプラザホテル松山
南館2階 サファイアールーム
主催 農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和6年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和6年2月28日（水）愛媛県松山市のANAクラウンプラザホテル松山において『地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸「百姓百品」』をテーマに、平成5年度農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞者である愛媛県西予市の「百姓百品グループ」の業績を取り上げて、約110名の皆様の参加の下、開催しました。

（オンラインでの配信も併せて行い50名を超える方にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和6年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和5年度（第62回）農林水産祭
（第36回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール	1
シンポジウム出席者	2
受賞者の業績概要	3
シンポジウムの記録	4

令和5年度（第62回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸「百姓百品」】

《スケジュール》

13:30~16:00

（敬称略）

- | | | | |
|---|-------------|--|-------------------------|
| 1 | 開 会 (13:30) | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 | 小栗 邦夫 |
| 2 | 挨拶 | 農林水産省中国四国農政局長
愛媛県知事
西予市長 | 仙台 光仁
中村 時広
管家 一夫 |
| 3 | 選賞審査報告 | 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査
(茨城大学農学部教授) | 福与 徳文 |
| 4 | 業績発表 | 令和5年度むらづくり部門天皇杯受賞
百姓百品グループ 会長
株式会社野村福祉園代表取締役 | 和氣 數男
井上 桃子 |

・・・休憩 (14:30~14:40) ・・・

- 5 ディスカッション (14:40)
(登壇者)
- ・コーディネーター
福与 徳文 (3に同じ)
 - ・業績発表者
和氣 數男 (4に同じ)
井上 桃子 (")
 - ・コメンテーター
島山 智之 (農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員
(NHK財団 専門委員 元NHKアナウンサー))
管家 一夫 (西予市長)
竹島 久美子 (愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科助教)

(内容)

- ・意見交換、質疑応答
- ・総括

- 6 閉 会 (16:00)

第36回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R6.2.28 (敬称略)

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	和氣 數男	令和5年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 百姓百品グループ 会長
	井上 桃子	令和5年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 百姓百品グループ (株式会社野村福祉園 代表取締役)
コーディネーター 及び選賞審査報告	福与 徳文	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 (茨城大学農学部教授)
コメンテーター	畠山 智之	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 (NHK財団 専門委員 元NHKアナウンサー)
コメンテーター	管家 一夫	西予市長
コメンテーター	竹島 久美子	愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科 助教
挨拶	仙台 光仁	農林水産省中国四国農政局長
	中村 時広 (代読：須藤 達也)	愛媛県知事 (愛媛県農林水産部農政企画局長)
	管家 一夫	西予市長
司会・進行	小栗 邦夫	(公財) 日本農林漁業振興会 常務理事

むらづくり部門

出品財 むらづくり活動

百姓百品グループ

愛媛県西予市



1 地域の概要

西予市は、愛媛県の南西部に位置する。野村地区は、市東部の中山間地域で、地区全体が四国山脈に囲まれており、四国カルストを源とする豊かな水と土壌に恵まれた自然の多様性に富んだ地域である。

高齢化や人口減少が進行し、経営耕地面積も減少している危機的状況を打破するため、当時の町役場担当者が視察先の野菜の移動販売に可能性を見出し、産直活動を開始した。活動に専念するため、平成10年に退職し、農家140人で「百姓百品産直組合」を設立。平成18年に生産者を株主とする「百姓百品株式会社」に移行した。

2 むらづくり組織の概要

耕作放棄の解消のため、農業生産法人「株式会社百姓百品村」を平成20年に設立し、農地を借り受け、青ネギの自社生産を開始した。農業の担い手確保と障がい者の経済的自立支援のため、就労継続支援B型事業所「株式会社野村福祉園」を平成25年に設立し、農福連携の取組を開始した。「地域の課題を農業で解決する」をミッションに、3つの組織が相互機能を果たしながら、地元住民と共に地域の問題に取り組んでいる。

3 むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

- ① 百姓百品株式会社では、地区内に集荷場を複数設置し、松山市内のインショップ等に配送・販売している。組合員数は、農産物だけではなく花きや加工品等の出荷者も加わり400人を超え、小規模農家、高齢者、女性や農協出荷中心の農家の補完的な出荷先となっており、貴重な収入源に繋がっている。
- ② 百姓百品村では、耕作放棄地（約200ほ場、15ha）を借り受け、通年栽培が可能な青ネギを生産し、業務用ネギとして30社との契約取引を行っている。当組織から契約農家として独立した2名のサポートなど生産者の育成にも注力し、新たに基盤整備を行う区域では、2.7haの農地を担い手に集積する予定となっている。
- ③ 野村福祉園では、ネギを主体とした農作業を百姓百品村から受託し、総勢40人程の障がい者が働いており、地区平均の2倍を超える高い工賃を実現している。

(2) 生活・環境整備面

- ① 地元住民一体となった産直事業は、住民の収入増だけではなく生きがいの創出にも繋がっており、加工品の出品は伝統食の継承にも寄与している。
- ② 高齢者や女性が株主になり組織運営に参画する環境や、農福連携による障がい者の活躍の場を創出している。地域おこし協力隊や地元農業大学卒業生等の若手職員を採用し、農村の因習に捕らわれない新しい感覚を地域に持ち込み取組に反映しており、代表取締役への若手女性の登用など世代交代も進んでいる。

4 他地域への普及性と今後の発展方向

本取組は、農業を通じて、小規模農家の所得確保、女性・高齢者・障がい者の活躍の場の創出、地域の雇用、耕作放棄地の発生防止に寄与し、地域全体を巻き込みながら活動を展開しており、今後も取組の発展が期待できる。地域の課題を持続可能な事業として体系化し、地域全体で取り組む「ソーシャルビジネス」として展開している本取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】 公益財団法人日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

ただいまから「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。本日は会場に多数のご参加をいただき、また、一方通行ではありますが、オンラインでも多くの方の参加が見込まれております。誠にありがとうございます。

本日のシンポジウムは、農林水産祭事業で表彰されました優秀事例の成果を関係者の方々に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと例年開催しているものでございます。農林水産祭は昭和37年に始まり、今年度で62回を迎えます伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は、過去1年間に各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました 500近い出品財の中から、厳正な審査を受け、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞の三賞を授与するものでございます。特に天皇杯につきましては、わが国で30の授与がされておりますが、ほとんどがスポーツ関係でございます。その30のうち七つを農林水産部門でいただいているわけでございます。ご皇室の農林水産業に対する厚い思いを非常にありがたく思っているところでございます。

本日は、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました愛媛県の「百姓百品グループ」の和氣会長と、関連する野村福祉園の井上代表にお越しいただきました。天皇杯受賞後は一層お忙しくなられたと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めましてお祝いと御礼を申し上げます。

それでは、本日は、共催いただいております農林水産省から中国四国農政局の仙台局長にご参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】 農林水産省中国四国農政局長 仙台 光仁

ご紹介いただきました農林水産省中国四国農政局長の仙台でございます。シンポジウムの開会に当たり一言ご挨拶を申し上げます。

初めに1月1日の地震でお亡くなりになられた方々に対しまして心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災されたすべての皆様に心からお見舞い申し上げます。農林水産省中国四国農政局といたしましても、職員を現地に派遣するなど、支援を行なっているところでございます。

農林水産祭、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました「百姓百品グループ」の皆様にご挨拶を申し上げます。それとともに、和氣会長を初め、グループの運営に携わってこられた皆様のご努力に心から敬意を表させていただきます。「百姓百品グループ」様は地域の課題を農業で解決するという活動に取り組んでいらっしゃいます。持続可能な中山間地域でのむらづくりのモデル事例ということで、私ども農林水産省といたしましても、まさに誇りとする手本として全国に広めたい、そういう取組でございます。詳しくはこの後の活動内容やパネルディスカッションでご紹介されると思いますが、本日お集まりの皆様、またオンラインでご参加の皆様、貴重な情報となっただけのことを祈念しております。

結びになりますが、本日のシンポジウムの開催に当たりまして、愛媛県様、西予市様初め、ご協力いただきました方々、またお忙しい中、足をお運びいただきました皆様に厚く御礼申し上げます。またオンラインでご参加の方々にも御礼申し上げます。本シンポジウムを契機といたしまして、各地域でむらづくりの創意工夫溢れる取組が広まっていくことを願ってやみません。本日ご参集の皆様のますますのご活躍、ご発展を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。続きまして、シンポジウムの開催に当たりましては、地元愛媛県と西予市の関係者の方々に大変お世話になっております。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。本日は愛媛県からは愛媛県知事の代理として農林水産部の須藤農政企画局長に参加いただいております。県を代表してご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】 愛媛県知事 中村 時広

（代読 愛媛県農林水産部農政企画局長 須藤 達也）

愛媛県農林水産部農政企画局長の須藤と申します。本来でありましたら、知事が参りまして、皆様にご挨拶申し上げるべきところ、ちょうど今、県議会が開催されておりまして、知事、特別職、部長級がこちらに参ることはかないません。代わりに知事から祝辞を預かってまいりましたので、私から代読させていただきます。

「本日、令和5年度農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」が盛大に開催されますことをご喜び申し上げますとともに、実施に当たりご尽力いただきました農林水産省並びに公益財団法人日本農林漁業振興会の皆様を初め、関係者の方々に深く敬意を表します。そして令和5年度農林水産祭むらづくり部門において栄えある天皇杯を受賞され

ました「百姓百品グループ」の皆様方に心からお祝い申し上げます。「百姓百品グループ」におかれましては、地域の課題を農業で解決するという理念のもと、地元農家の方を初め、県外から転入された若者、高齢者や障害のある方々など、だれもが個性を活かして能力を発揮できる場を整備され、産直市の運営、耕作放棄地を活用した野菜の栽培などに熱心に取り組まれており、農業振興はもとより、地域の活力向上に大きくご貢献いただいております。県におきましても、愛媛農業の持続的な発展に向け、農家の所得向上、担い手の確保、育成などに力を注ぐとともに、西日本豪雨災害からの創造的復興を全力で押し進めてきたところであり、店舗や農地が浸水など、甚大な被害を経験された皆様が一致団結して事業を再開され、このたび天皇杯に輝かれたことは、現在も完全復興を目指して励まれている農業者の方々を勇気づけるものとまことに意義深く存じます。本シンポジウムを契機に創意工夫に富み、人の温かさに溢れた「百姓百品グループ」のご活動が県内に広く普及し、新たな担い手の確保や、耕作放棄地の抑制など、多岐にわたる地域課題の解決につながりますことをご期待申し上げます。また、ご来場の皆様におかれましては、引き続き、本県の農業振興と、愛顔溢れる愛媛県の実現に一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。終わりに、本シンポジウムのご成功と皆様方のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして挨拶いたします。令和6年2月28日、愛媛県知事、中村時広。代読」でございます。

本日は誠におめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。続きまして、地元の西予市からは管家市長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】西予市長 管家 一夫

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました「百姓百品グループ」の地元であります西予市から参りました市長の管家でございます。令和5年度の農林水産祭の優秀農林水産業者に係るシンポジウムがこのように多くの皆様のご参加の中で開催されること、私も大変うれしく、喜んでいるところでございます。「百姓百品グループ」が今回農林水産祭のむらづくり部門におきまして天皇杯に輝いたことは大変誇らしく、また西予市にとってもうれしい話題でありました。そして、この栄誉を受賞されるまで、ずっと活動を展開されておりました関係者の皆様にお祝いを申し上げるとともに、これまでのご尽力に対しまして、改めて敬意を表する次第でございます。

「百姓百品」は、私どもの町、高齢化率が44%であります。その中でやはり地域を盛り上げないといけない、地域の活性化ということで取り組まれた活動が原点であると聞いております。いろんなところ、海拔1,400mの西予の中、特にシルクとミルクの町である野村は山間地、そして1,400mの大野ヶ原という地形もある。いろんな気候が混じり合う、いいところがございます。その中で各地域ではおじいちゃん、おばあちゃんを初め、農業後継者の方が酪農など、いろんなことをやられておりました。そういう人たちの力を結集されて、グループを結成され、そしてそれをただ地元だけの消費ではなくて、松山の地での販売、また全国のいろんな店で販売するという経営センスに溢れた活動をしながら、地域の皆様の生きがい、そして所得、ちょっとお孫さんに小遣いをあげたい、そういう気持ちを持っておられる人たちの生きがいと収益を兼ねた組織、また地域の障害者の皆さんが地元、そして生きがいを持ちながら福祉的就労ができる組織を作られて、すばらしい活動をされたことが評価されたことにつきましては重ねてお祝いを申し上げます。

西予市は、実は平成28年に同じくむらづくり部門の天皇杯を「地域協同組合無茶々園」が受賞しました。2例目の快挙になります。国、そして県におかれましては、西予市内の各地域のいろんな取組、活動に対して高い評価をいただいていることに感謝を申し上げる次第でございます。

結びに当たりまして、本シンポジウム開催に当たり、農林水産省及び公益財団法人日本農林漁業振興会を初め、多くの皆様のご尽力に対しまして、心から感謝を申し上げますとともに、本会がご出席の皆様を初め、農業に携わる皆様にとって有意義な会になって、その活動が全国に、また県内各地に広がることをご祈念申し上げますとともに、皆様の益々のご健勝、ご活躍をご祈念申し上げます、私のお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。管家市長には後ほどパネルディスカッションにもコメントーターとして参加いただきます。

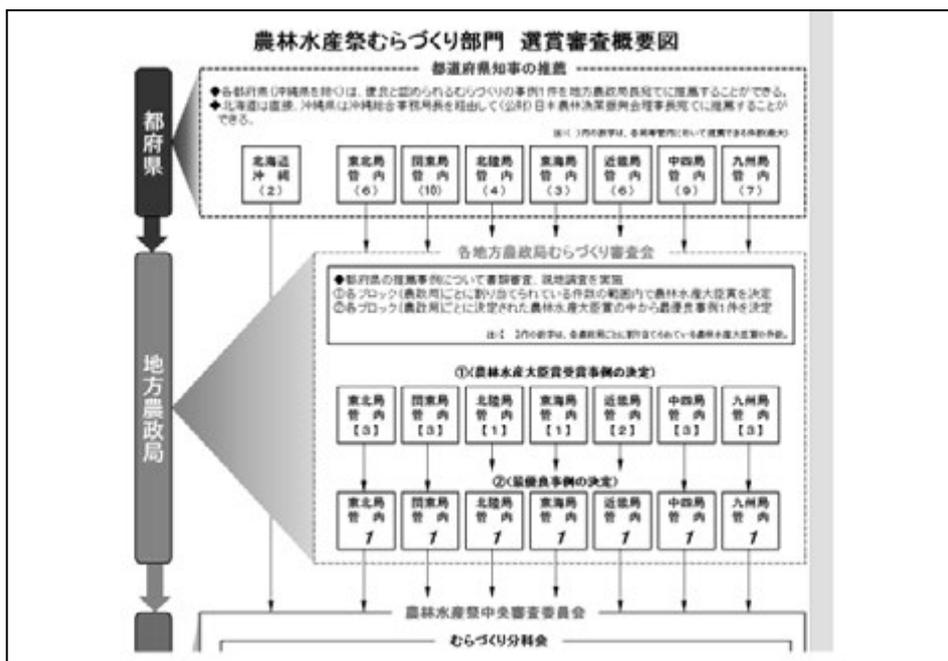
それでは議事に入ります。最初に、選賞審査報告を中央審査委員会むらづくり分科会の主査であります茨城大学農学部教授の福与先生にお願いをいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 福与 徳文
(茨城大学農学部教授)

私からは、むらづくり部門の天皇杯がどのような手順で、どのような基準で選ばれたのか、今回、どうして「百姓百品グループ」が選ばれたのかについてお話しします。

最初に、どのように天皇杯が選ばれるのかについて述べます。まず、各都道府県から、むらづくりの優秀な事例が、それぞれの地方農政局に推薦されます。そういった優秀な事例の中から、農政局単位で農林水産大臣賞が複数選ばれます。たとえば中四国農政局では

最大3事例選ばれるわけですが、その中で最も優秀な事例の一つ、むらづくり分科会に推薦されます。そして第1回むらづくり分科会において、そ



の中から現地調査の対象である3事例を選び、現地調査を行います。第2回分科会では、現地調査の結果に基づいて、天皇杯や内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞を決めていきます。ただし、農政局がない北海道や沖縄については、別途、北海道・沖縄枠で1事例推薦していただき、分科会において、まず農林水産大臣賞にふさわしいかどうかを審議した後で、各農政局から推薦された7事例と合わせて計8事例の中から、現地調査の対象となる3事例を選び、現地調査を行った上で、3賞を決めていくという段取りになっています。

令和5年度は、第1回むらづくり分科会を7月25日に開催しました。分科会では、各農政局等からプレゼンテーションしていただき、現地調査の対象となる3事例を選定しました。それから、8月下旬に集中的に現地調査を行いました。山形県鶴岡市(8月24日)、愛媛県西予市(8月28日)、それから愛知県豊田市(8月30日)に伺っています。これらが、

天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞の候補になるわけですが、その現地調査を経て、第2回分科会（9月11日）に調査結果を持ち寄って議論して、3賞にふさわ



しいのはどこかを決め、「百姓百品グループ」が天皇杯に選ばれたということになります。

次に、どのような基準で審査されるのかをお話しします。まず、「むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況」、それから「むらづくりの合意形成の状況」です。創意工夫とか、自主的な努力、合意形成は重要ですね。それと関係するのですが、「むらづくりの推進体制の整備・運営

選賞審査基準

- ・むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
- ・むらづくりの合意形成の状況
- ・むらづくりの推進体制の整備・運営の状況
- ・むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況
- ・むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況

の状況」。それから農林水産祭なのですから、やはり「地域の農林漁業の振興にどう活かされているのか」、「担い手の育成にどう寄与しているのか」という基準が重要になります。それから「むらづくり」ですから、ただ農林漁業を振興すれば良いというだけではなく、「豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況」が重要な審査基準になります。

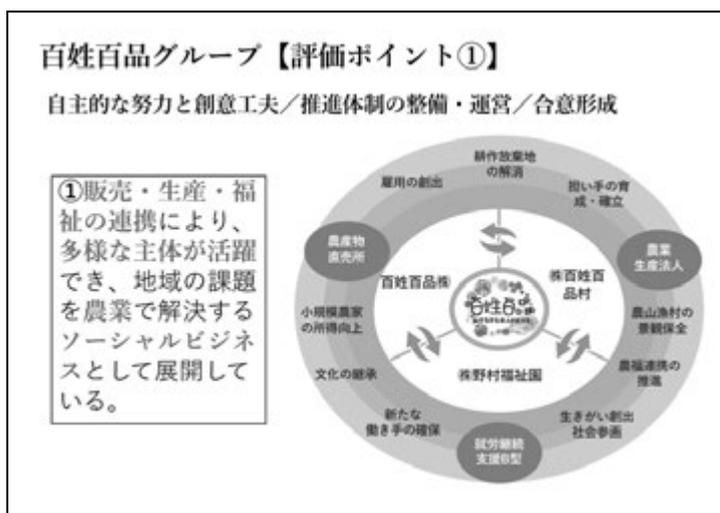
こういった基準により選定された農林水産大臣賞が一覧として示されていますが、この中から選りすぐりの3



事例を現地調査して、その中から「百姓百品グループ」が天皇杯に選ばれたわけです。ちなみに、内閣総理大臣賞を受賞したのが山形県鶴岡市の越沢自治会の「おいでよ！そばに 棚田と清水、摩耶の里・こえさわ」で、日本農林漁業振興会会長賞には愛知県豊田市の一般社団法人押井宮農組合の「農の営みを将来に！地域まるっと「地域支援型農業」で繋ぐ未来」が選ばれています。

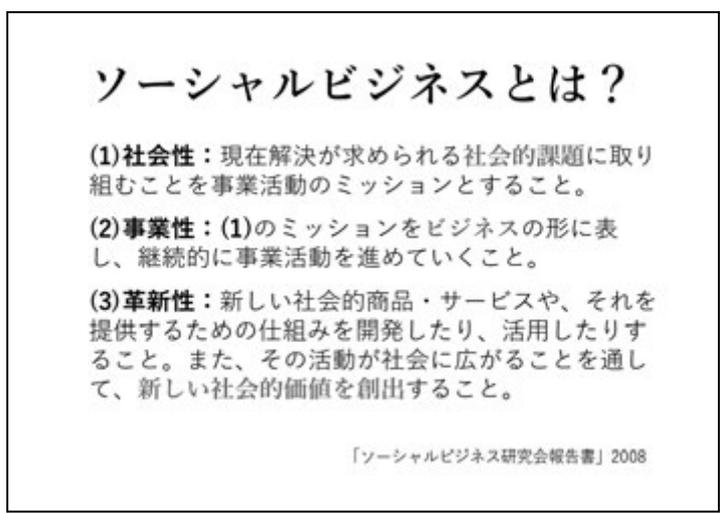
さて、「百姓百品グループ」の活動内容については、この後、詳しい報告がありますので、ここでは評価ポイントについて簡単に紹介します。

まず評価ポイント①です。評価基準に照らすと、「自主的な努力と創意工夫」、「推進体制の整備・運営」、「合意形成」といった点での評価ということになります。「百姓百品グループ」の中で、販売部門である百姓百品株式会社、



それから生産部門である株式会社百姓百品村、それから福祉部門である株式会社野村福祉園、この3社の連携、つまり販売、生産、福祉、これらが連携することによって、お年寄りから若者、それから障がい者の方々まで、こういった多様な主体が誇りを持って活躍でき、地域の課題を解決しています。しかも、それ自体もさまざまな問題を抱えている「農業」によって解決していく、そういうソーシャルビジネスとして展開している点が、評価ポイント①になっています。

ここで簡単に「ソーシャルビジネス」について、経産省「ソーシャルビジネス研究会報告書」に基づいて整理しておきます。ソーシャルビジネスの特徴としては、社会性、事業性、それから革新性が挙げられますが、社会的課題に



取り組んでいること、ビジネスとして収益をあげていること、それから新しい社会的価値

を創出していることで、まさに「百姓百品グループ」が当てはまると思いますし、地域の課題解決に大いに貢献しているわけですから、ソーシャルビジネスの中でもコミュニティビジネスに位置づくのではないかと考えます。

次に評価ポイント②です。

「地域農林漁業の振興」、
「豊かで住みやすい農山漁村の建設」という基準で評価された部分です。先ほど、販売、生産、福祉の3つの部門の連携が評価されたと申し上げましたが、そのうちの一つ、販売部門への評

百姓百品グループ【評価ポイント②】
地域農林漁業の振興／豊かで住みやすい農山漁村の建設



松山市内インショップ



百姓百品本店直売所

②百姓百品（農産物直売所）では、地区内に集荷場を複数設置し、松山市内のインショップ等に配送・販売している。組合員数は400名を超え、小規模農家、高齢者、女性や農協出荷中心の農家の補完的な出荷先となっており、住民の収入増だけでなく生きがいの創出にも繋がっており、加工品の出品は伝統食の継承にも寄与している。

価です。「百姓百品」（農産物直売所）では、地域内に集荷場を複数設置して、つまりお年寄りたちがわざわざ届けなくても、ちゃんと集荷して、それらを松山市内のインショップ等に配送、販売しており、組合員数は400名を超えています。小規模農家、高齢者、女性の出荷先となっていますし、農協出荷中心の農家の補完的な出荷先にもなっています。それが住民の収入増だけでなく、90歳以上のお年寄りまでがそれに生きがいを感じて頑張っており、高齢者の生きがいの創出にもつながっています。また、加工品の出品は伝統食の継承にも寄与しています。これが評価ポイント②になります。

それから評価ポイントの③です。これが「地域農林漁業の振興」、「担い手の育成」、「豊かで住みやすい農山漁村の建設」という点に関わることで、グループの中では生産部門に対する評価ということになります。上で述べたよう

百姓百品グループ【評価ポイント③】
地域農林漁業の振興／担い手の育成／豊かで住みやすい農山漁村の建設



青ネギの収穫作業



農地中間管理機構関連農地整備事業

③百姓百品村（農業生産法人）では、耕作放棄地（約15ha）を借り受け、通年栽培が可能な青ネギ（業務用）を生産し、30社との契約取引を行っている。法人から独立した2名の契約農家をサポートするなど生産者の育成にも注力し、新たに基盤整備を行う区域では2.7haの農地を担い手に集積する予定である。

に、お年寄りたちが生き生きと活躍する状況をつくることも大変重要なのですが、やはり若者たちが本気で農業で稼げるようにならないと、若者の地域への定着にはつながりません。そこで、百姓百品村という農業生産法人を立ち上げて、耕作放棄地を借り受けて、地

域の他の生産者とバッティングしない作物で、それなりの収益を上げられる作物を探し出し、業務用の青ネギにたどり着き、今、30社との契約取引が行なわれています。そういった取り組みの結果、法人から独立した2名の若者が暖簾分けのように独立し、つまり若い農業経営者の育成につながっているという点が評価されています。それから、農地中間管理機構型の農地整備にも取り組まれておりまして、地域の農地をこういった儲かる農業（若者もそれで生計を立てていける農業）で活用し、耕作放棄を解消・抑制していることが、一つの評価ポイントとなります。

それから最後になりますが、「百姓百品グループ」の評価ポイント④と⑤を挙げております。これが「担い手育成」、「推進体制の整備・運営」、「豊かで住みやすい農山漁村の建設」といった評価基準と係わるところです。まず、評価ポイント④ですが、福祉部門である野村福祉園、就労継続支援B型ですが、先ほどの生産部門の青ネギの育苗とか、出荷調製の作業は大変なわけです。そこを福祉園のほうで引き受けて、カバーしているということです。障がい者の方々の工賃ですが、最近、テレビなど、マスコミでも取り

百姓百品グループ【評価ポイント④⑤】
担い手育成／推進体制の整備・運営／豊かで住みやすい農山漁村の建設

④野村福祉園（就労継続支援B型）では、青ネギの育苗、出荷調整作業を**百姓百品村**から受託し、約40人の障がい者が働いており、地区平均の2倍を超える高い工賃を実現している（農福連携による障がい者の自立）。



青ネギの出荷調整作業

⑤百姓百品グループ：百姓百品では高齢者や女性が株主になり、組織運営に参画している。また、地域おこし協力隊や地元農業大学卒業生等の若手職員を採用し、農村の因習に捕らわれない新しい感覚を地域に持ち込んで取組に反映している。さらに百姓百品と野村福祉園では代表取締役への若手女性の登用など世代交代も進んでいる。

上げられて、最低賃金ぐらいを目指すなどということが報道されていますが、少なくともこの野村福祉園は通常の2倍の工賃を実現していて、障がい者の方々にも、ただ工賃をもらうだけではなくて、生きがいか、誇りにつながるような、そういった方々の自立につながっていく仕組みもつくって、先ほどの販売と生産、それから農福連携の部分、こういった3部門がうまく連携して回っているということです。

それから評価ポイント⑤ですが、こういった取り組みが、どういった人たちによって担われているのか、継承されているのか、という点が重要です。特に私が注目したのは、多様な主体と言われる中で、若者とか、障がい者の方々が活躍されていることはとても重要ですが、特に「百姓百品グループ」で女性の活躍が目覚ましく感じられたわけです。まず販売組織の「百姓百品」では、高齢者や女性が株主になり、組織運営の参加している。それから地域おこし協力隊や地元農業大学卒業生の若手職員を採用して、農村の因習に捕

らわれない。ちょっとステレオタイプかも知れませんが、農村と言うと、ある一定年齢以上のおじさんが威張っていて、いろんなことを決めていると思われがちですが、百姓百品グループでは、そういった因習には捕らわれない。新しい感覚を地域に持ち込んで取組に反映させています。さらに、ここのところを評価したいと思うのですが、販売部門の「百姓百品」、福祉部門の「野村福祉園」、これらの代表取締役、後でそのお一人に登場していただくわけですが、若手女性を登用されていて、世代交代も進んでいる。むらづくりという、「女性の参画」が言われているのですが、その場合も、直売所で働くとか、農家レストランで働くとか、女性が食事係のように働いていることが多く、そういうことを「女性の参画」ととらえることが多くなっています。「百姓百品グループ」でも、現地調査のときにいただいたお弁当は、おばちゃんグループが作ってくれて、おいしくて、それはそれでいいことなのですが、この「百姓百品グループ」では、さらに進んで、ヘッドクォーター（司令部）に女性が入っていて、世代交代も進んでいます。多様性という点でも大いに評価したいところであります。

私からは、「百姓百品グループ」がなぜ天皇杯に選ばれたのか、評価基準とはどういったものなのか、どのような手順で選ばれるのかについてお話しさせていただきました。ご清聴、ありがとうございました。（拍手）

○司会 福与先生、どうもありがとうございました。次は業績発表でございます。天皇杯受賞の「百姓百品グループ」の和氣会長と、野村福祉園の井上代表取締役にお願いをいたします。

**【業績発表】令和5年度（第62回）農林水産祭むらづくり部門 天皇杯受賞
百姓百品グループ（株式会社野村福祉園 代表取締役）井上 桃子**

皆様、こんにちは。ご紹介にあずかりました株式会社野村福祉園の井上桃子と申します。このたびは「百姓百品グループ」が天皇杯受賞に際しまして、このようなシンポジウムを開催していただきましたこと、厚くお礼申し上げます。また、日本農林漁業振興会様、農林水産省の皆様を初め、本日、大勢の方々にお集まりいただきまして感謝申し上げます。このたび、令和5年度農林水産祭むらづくり部門において、栄えある天皇杯を賜りましたことは誠に光栄に思います。400名の農家さん、100名の職員、利用者さんとともに喜びを分かち合いました。西予農業指導班の皆様を初め、審査員の皆様、関係者の皆様には改めてお礼申し上げます。

早速ではありますが、「地域の課題を農業で解決する」というテーマで「百姓百品グループ」の取組について発表させていただきます。

先ほどもご紹介いただいたように「百姓百品グループ」は三つの法人で構成されており、「地域の課題を農業で解決する」という共通のミッションのもとに活動しています。創業順に上から、農産物直売所を運営している百姓百品株式会社、農業生産法人である株式会社百姓百品村、

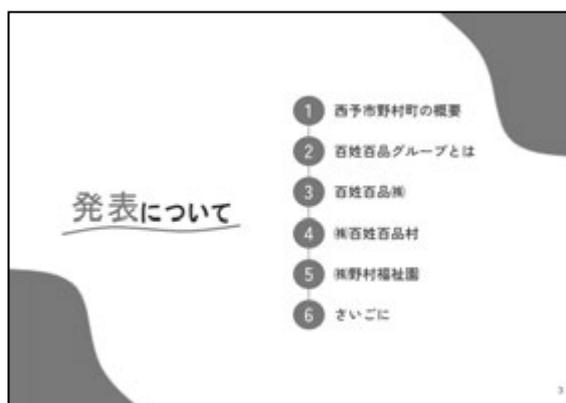


障害福祉サービスをしている株式会社野村福祉園、この三つの運営をしております。現在では職員、利用者100名、農家さん400名、合計500名でこの三つの会社を支えています。3社とも、現会長である和氣数男が立ち上げたものですが、現在ではそのうちの一つである野村福祉園の代表として任されるようになりました。

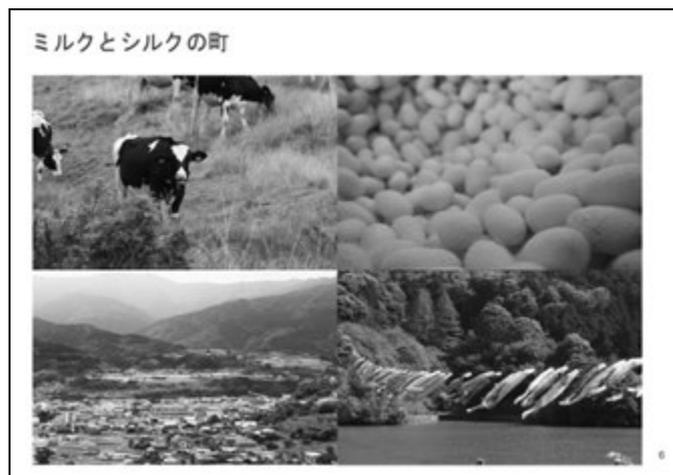
そんな私の簡単な自己紹介をさせていただきますと、地域活性化を目的とした総務省の事業である地域おこし協力隊として、13年前に北海道の旭川からここ西予市野村町にやってきた移住者です。私が移住した惣川地区は限界集落と言われ、早くから婦人会、青年団活動がなくなってしまい、初めて訪れた印象としては、日本昔話で見るとは、あるのは360度見渡す限りの山とお年寄り、そんな風景が目の前に広がっていました。しかし、惣川地区は百姓百品の活動が盛んで、始まるきっかけとなった村であり、人口400人の村に「百姓百品」に出荷する農家さんが40名ほどおり、活気に満ちあふれていました。元気なお母さんたちと一緒に活動する中で、当時、代表だった和氣さんと出会い、「百姓百品グループ」が行なっている事業に惚れ込み、協力隊の活動期間である3年が過ぎた後もここに暮らし続ける決意をしました。現在では地元の方と結婚し、2児の母として、会社の代表として二足の草鞋で日々奮闘しています。

それでは、以上のような目次に沿って取組について発表させていただきます。

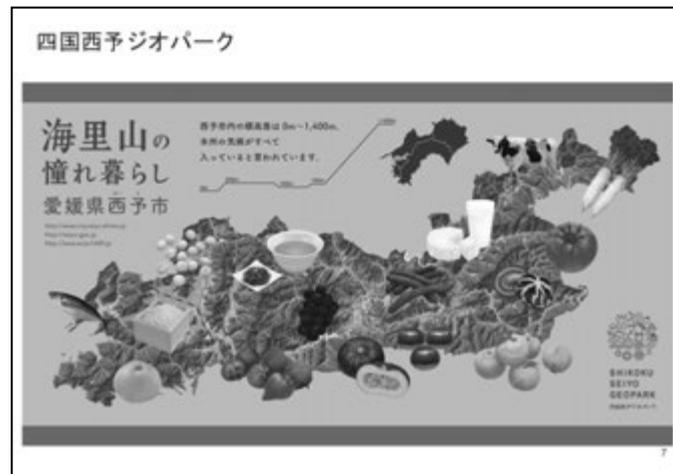
まずは、ここ愛媛県西予市野村町について説明させていただきます。「百姓百品グループ」があるのは愛媛県南部に位置し、海拔0mから標高1400mの広大な土地の中



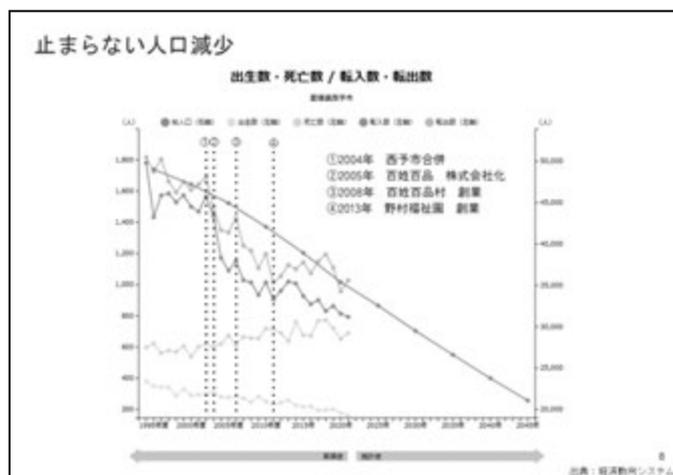
で多彩な自然を持ち合わせた地域です。野村町を含む5町からなり、その75%を山林が占め、高知県との県境には日本三大カルストと知られる四国カルストが広がっています。山々に囲まれた野村町では、戦後間もないころには養蚕や酪農で栄え、「ミルクとシルクの町」と自称してきました。しかし、養蚕については安価な外国産生糸の攻勢のより次第に衰退。酪農については、今も県内市町の中でもダントツの1位で、県全体の約半分を占めています。加えて、古くから主要産業は農林、畜産業、水産



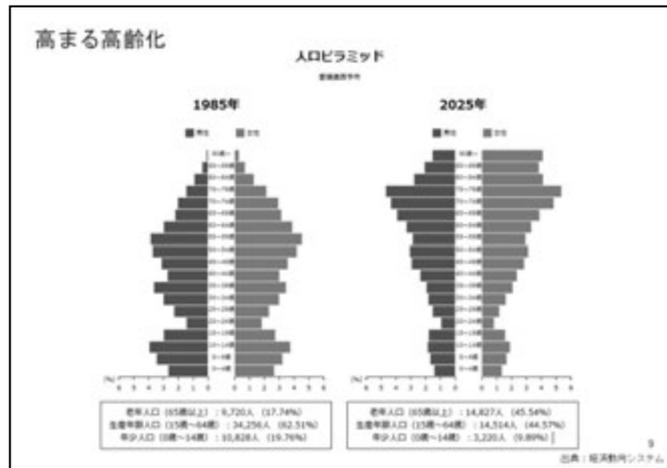
業などであり、その中でも米、果物、野菜といった農業が西予市の第一次産業の中心となっています。また、西予市は四国西予ジオパークとして2013年に日本ジオパークに認定されました。ご覧のように、西予市は標高差が0mから1400mあり、豊かな自然環境の中で、本州すっぽり西予と言われるくらい多種多様な農林水産物が生産されている恵まれた地域です。



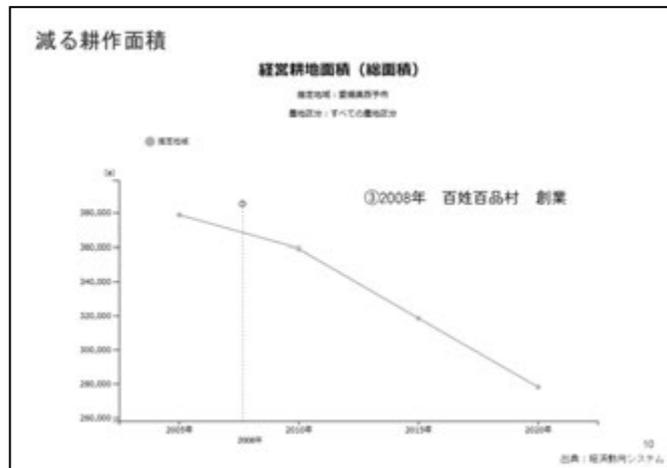
こうした中、ここ野村町においても、農業の担い手不足と高齢化の波が押し寄せており、地域の深刻な問題となっています。平成16



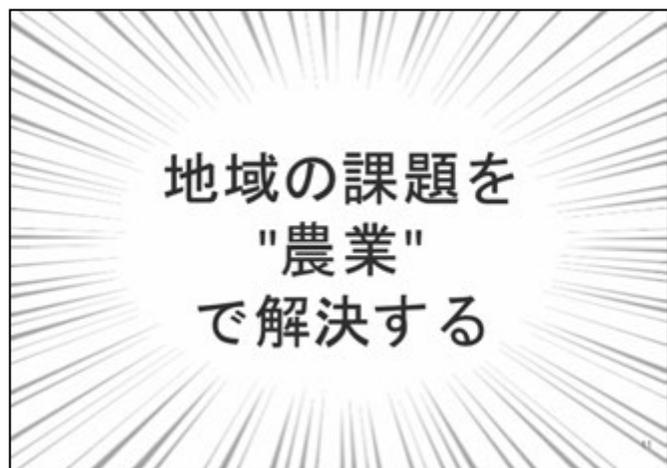
年の平成の大合併で、町が新設、合併して誕生した西予市ですが、それ以降も人口は減少を続け、令和元年まで合併時から約2割の人口が減少しています。また、一言に人口減少と言っても、減少する年代によって影響の出方は変わり、特に0から29歳は1985年と比較して半分以上減少



しており、60歳以上が増加している状況で、少子高齢化が顕著に現れています。世帯数を見ても、合併時とほとんど変わっておらず、1世帯における人数が減り、独居世帯数が増えております。こちらは経営耕作面積の推移になりますが、こちらもまた、高齢化に比例するように耕作面積が年々減少してきているのがわかります。



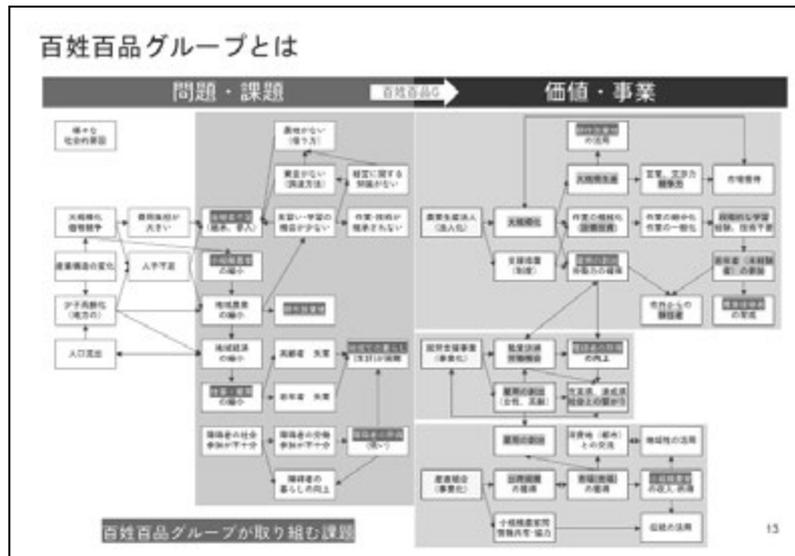
こうした人口減少と少子高齢化対策の一環として行なわれたふるさと創世1億円事業が記憶に新しい方もこの会場にはいらっしやると思いますが、町おこしの気運が野村町でも高まる中、何かしようとする役場の職員、現会長が、農協一元出荷のもとで地域農業を支えていた農家、特にまだまだ補助労働力としての位置づけであった田舎の女性農業者が農協には出荷できないB級品、はね



物野菜、近所に配りきり、残った野菜を山に捨てているのを目の当たりにして、もったいない、お金に換えよう、都市部に売りに行こうと始まったのが百姓百品が生まれた経緯です。こうして地域の課題を農業で解決するというミッションをもとに始まっていきました。

前置きが長くなりましたが、「百姓百品グループ」が掲げるミッションと地域課題を挙

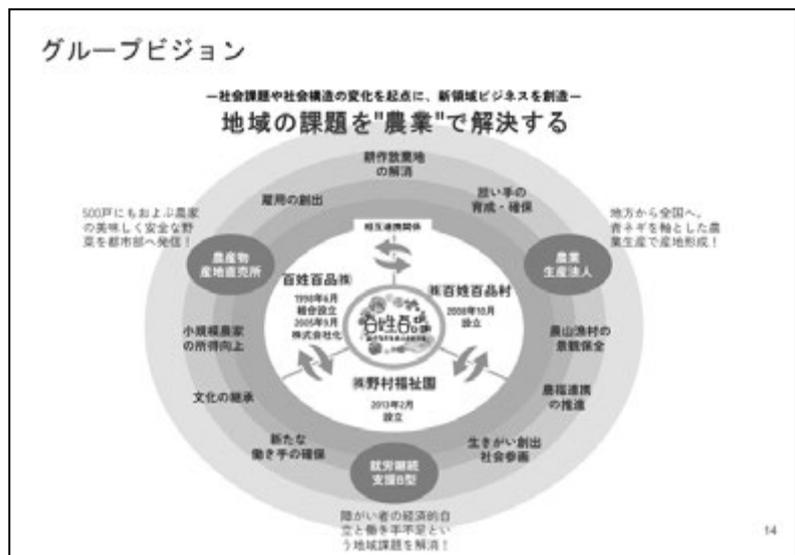
げながら事業構造を説明していきます。ご覧いただいているのが相関図になります。前述と重複する部分もありますが、社会構造の変化によって地域社会にはさまざまな課題が山積みとなっています。その発端は人口減少や少子高齢化による



ものと考えています。そこで、農業という分野において発生している問題や課題の解決の一助になろうと活動しているのが「百姓百品グループ」となります。問題、課題を六つに大別して、1、後継者不足、2、小規模農家の不足、3、耕作放棄地の増加、4、地域での暮らしが困難、5、仕事、雇用の縮小、6、障害者の暮らし、活躍の場の不足があると考えております。こうした課題を三つの会社が連携して価値に換えていくのが「百姓百品グループ」です。

そして、こちらの図が連携体制と事業の創出価値を表したものになります。三つの会社は相互に連携しながら、これらの価値を生み出し、持続可能な地域振興を目指しております。

ここからは個社別に事業の成り立ちや活動の詳細を

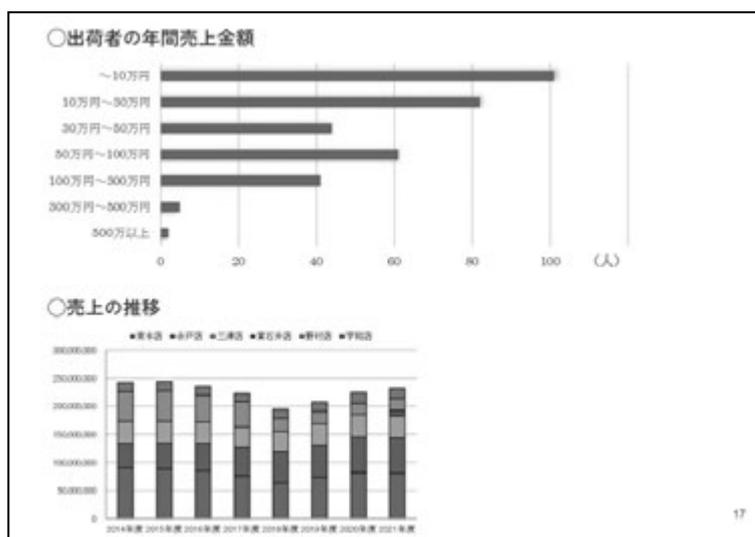


説明させていただきます。まずは「百姓百品」です。「百姓百品」の始まりは深刻化する地域の高齢化、人口流出に対する全国的な村おこしの流れを受けて、当時の野村町も村おこし部会が結成され、公民館が担当することになりました。そのとき、町役場の公民館職員であった現会長の和氣さんが担当として先進地視察に訪れた高知県佐川町で、町の農産物を高知市内の住宅街に持って行き、販売し、それがよく売れていたことから、これはおもしろい、村おこしと言えば文化活動もあるが、長続きさせるためには経済を伴う活動が

いいと考えるようになり、この考えに賛同してくれた地元農家とともに始めることにしました。平成4年にまずは野村町の町内の農協の店頭で販売を始めてみたところ、飛ぶように売れたことから徐々に野村町から松山市への販売をと考え、販売場所を確保、拡大していきました。このとき、和氣会長は町職員であったため、人事異動等で担当が変わったら、この事業は続かないだろうと考え、平成10年に公務員を早期退職して、村おこしのための直売活動に専念することを決意し、



農家140人で百姓百品産直組合を立ち上げました。そして、平成18年には生産者を株主とする百姓百品株式会社として法人化し、新たなスタートを切りました。その際、お弁当やお餅、お菓子、加工品、お花、ミカン、水産加工品など、野菜以外の出荷者も活動に加わり、地元住民一体となって地域産物の利活用を推進していくことができるようになったのです。



現在では400名ほどの生産者集団となり、年間売上は2億3,000万ほどになっております。多い方では年間売上600万、500万以上が3名、100万以上売り上げる出荷者は40を超えております。株式化した際の生産者の男女比は1対3と圧倒的に女性が多く、これまで婦人会や生活改善研究等で培われた知識が発揮できる場と認識され始め、生活者や消費者の視点を持つ女性の意見を取り入れることが収益の向上につながることを「百姓百品」が実証してくれました。女性が農業の補助的役割を担っていた時代とは違い、自分名義の口座に自分で稼いだお金が毎月入っていることによって、社会の一員としての自信と充実感を持

って暮らし、独居になっても畑を守り、待っているお客様のためにと、都会に出た子供たちを頼ることなく暮らす女性が数多くいます。また、会員の平均年齢が72歳となるこの生産者集団は、年金以外の収入があることによって、病院なんて行く間がない、2人の孫の結婚には100万ずつ送った、韓国に旅行に行ってきたよというご高齢夫婦もいたり、「百姓百品」で稼ぐことが生きがいとなっていることが伺えます。

創業当時から一緒に歩んできた今年83歳になる西谷千代子さんです。まだまだ現役で、今年の売上も全体のトップ5に入るほどの方です。お父さんと2人暮らしの西谷さんは、野菜から加工品、あらゆるものを作り、西谷さんの名前が付いた野菜なら何でも買うとい



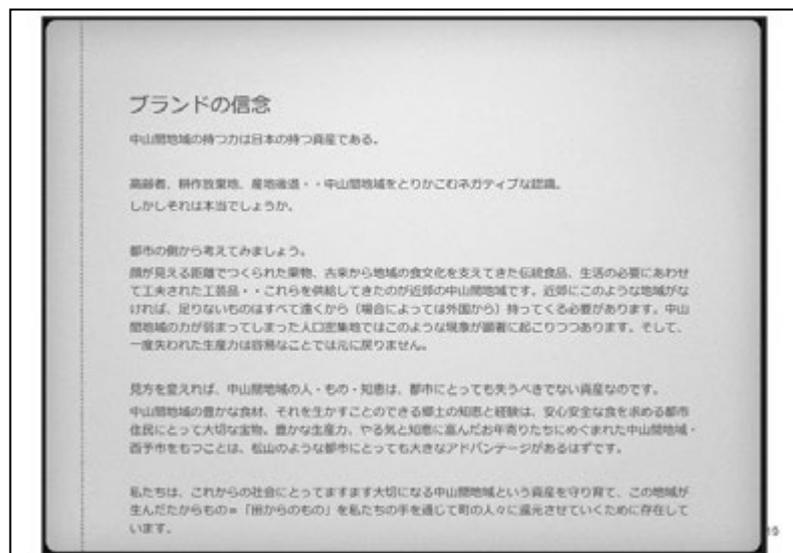
うファンがいるほど、名前で野菜が売れている生産者の1人です。「百姓百品」は毎年各集落を回り、懇談会を開催し、生産者の生の声を聞き、運営に活かしております。そのときの映像を今から流します。

(映像放映)

「西谷千代子です。いつもお世話になります。野菜と言っても、年じゅう、ほとんど百品に出すものを一生懸命作っております。今は白菜、大根、春菊、レタス、ゴボウとかぐらいですが、主に干し芋やコンニャク、漬け物、そういうものを作っております。以上です(笑)」

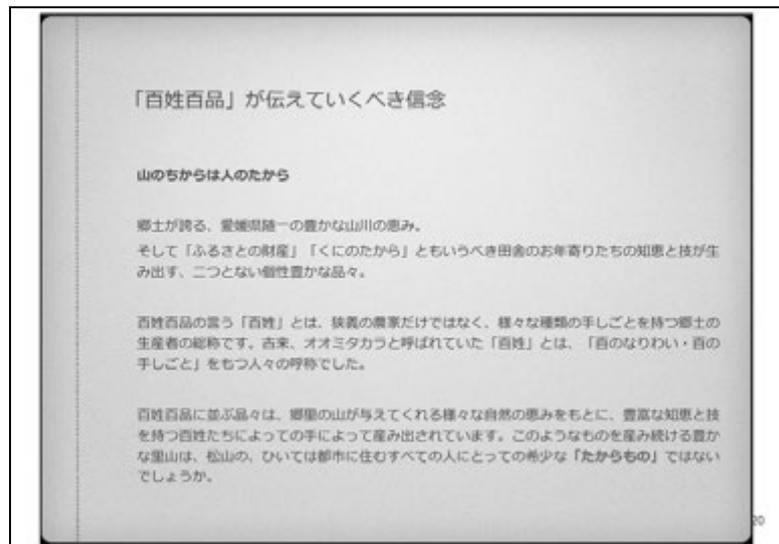
西谷さん、今年はまだ80歳を超えますが、元気に「百姓百品」の生産者として活躍していただいております。

創業時に掲げたコンセプトが次のようなものです。「中山間地域の持つ力は日本の持つ資産であ



る。高齢者、耕作放棄地、産地後退・・・中山間地域をとりかこむネガティブな認識。しかしそれは本当でしょうか。都市の側から考えてみましょう。顔が見える距離でつくられた果物、古来から地域の食文化を支えてきた伝統食品、生活の必要にあわせて工夫された工芸品・・・これらを供給してきたのが近郊の中山間地域です。近郊にこのような地域がなければ、足りないものはすべて遠くから（場合によっては外国から）持ってくる必要があります。中山間地域の力が弱まってしまった人口密集地ではこのような現象が顕著に起こりつつあります。そして一度失われた生産力は容易なことでは元に戻りません。見方を変えれば、中山間地域の人・もの・知恵は、都市にとっても失うべきでない資産なのです。中山間地域の豊かな食材、それを生かすことのできる郷土の知恵と経験は、安心安全な食を求める都市住民にとって大切な宝物。豊かな生産力、やる気と知恵に富んだお年寄りたちにめぐまれた中山間地域・西予市をもつことは、松山のような都市にとっても大きなアドバンテージがあるはずです。私たちは、これからの社会にとってますます大切になる中山間地域という資産を守り育て、この地域が生んだたからもの＝「田からのもの」を私たちの手を通じて町の人々に還元させていくために存在しています」。

「「百姓百品」が伝えていくべき信念」、「山のちからは人のたから」、「郷土が誇る、愛媛県随一の豊かな山川の恵み。そして「ふるさとの財産」「くにのたから」ともいうべき田舎のお年寄りたちの知恵と技が生み出す、二つとない



個性豊かな品々。「百姓百品」の言う「百姓」とは、狭義の農家だけではなく、さまざまな種類の手しごとをもつ郷土の生産者の総称です。古来、オオミタカラと呼ばれていた「百姓」とは、「百のなりわい・百の手しごと」をもつ人々の呼称でした。「百姓百品」に並ぶ品々は、郷里の山が与えてくれる様々な自然の恵みをもとに、豊富な知恵と技をもつ百姓たちによっての手によって産み出されています。このようなものを産み続ける豊かな山里は、松山の、ひいては都市に住むすべての人にとっての希少な「たからもの」ではないでしょうか」。

その思いが会社のロゴにも表されています。

こちらの写真は年に1度5月に行なわれる総会の際の様子になります。多くの生産者の皆さんが熱心に参加されており、さまざまな議論を重ねることで会社を成長させてきました。総会後は決まって農家さんの野菜や加工品、スイーツを持ち寄って懇親会を開催します。

365日、新鮮な野菜をここ西予から70km北に位置する松山へ届けることで消費者より支持いただいている「百姓百品」の1日の流れです。西予市は東西に約50kmと広いので、西

のほうの集荷場の荷物は前日夕方にピックアップしておきます。その荷物を積んで、毎朝6時に自社の4tトラックが野村を出発します。松山に行くまでの経路の中で設置してある4カ所の集荷場に置いて野菜を順々にピックアップし、松山へ向かいます。コープえひめの3店舗の開店前に届くように順番に1台のトラックでお届けしております。スーパーに届いた野菜は「百姓百品」が雇用している専属のパートさんが素早く陳列をします。開店と同時に我先にと「百姓百品」の野菜を目掛けてお客様が入って行きます。専属のパ



ートさんは陳列が終わると、お客様の接客に追われます。お客様に説明をしたり、注文を受けたりと、消費者と生産者の間を結びつけてくれる重要な存在です。ほかのインショップでは見られない光景、これが「百姓百品」に根強いファンがいてくださる秘訣です。あれよ、あれよとし



ているうちに、あっという間にお野菜が売れていき、午後にはコンテナの中は空っぽです。

この様子を見た視察に来られた都会の方に「宝物探しのようだね」と言われたことがあります。

コープえひめの中でも特に売上の悪かった東本店からインショップが始まり、「百姓百品」の集客力により、コープの売上は短期間で急増。日本生協連盟から視察が来るほどだったとか。「百姓百品」の評判は広がり、コープ余戸店、コープ三津店へと広がりました。現在の販売店舗は県内5店舗です。



地域で開催されるイベントでは、杵と臼でつく餅つきが功を奏し、「百姓百品」と言えば餅つきと言われるほど、市内、市外、あらゆるところで餅つきをしてきました。それと同時に、生産者がみずから作った野菜、加工品も直接売ること



をPRし、消費者とつながり、販売力も身につけていきました。また、コープ組合員さんからの要望で、西予市の野菜を使った料理教室を開催するなど、地区内外の消費者に地元農産物や農村の暮らしのよさを伝え

ています。地元を整備されている加工施設を利用したり、みずから起業し、加工所を整備して手作り加工品を販売したりする女性、農業者等々も次々と誕生し、これまで培ってきた伝統を生かし、生き生きと活動する方がたくさんいます。販売する加工品はお寿司や巻き羊羹、饅頭、しば餅など、地域に伝わる郷土料理が中心で、地元を離れた人にもなつかしい、故郷の味として人気を博しており、食文化の伝承、PRにもつながっています。

「百姓百品」の価値をまとめると四つ挙げられるかと思います。①、高齢者・女性などの小規模農家の営農対策。②、系統出荷などの補完的役割。③、安全な農産物の生産。④、都市との交流。

生産し、出荷することか生きがいであることはもちろん、「百姓百品」の活動は、地域貢献、地域農業の活性化、耕作放棄地の減少、医療費の削減にもつながります。

続いては、二つ目の会社、百姓百品村についてです。百姓百品村を創業したのは、産直事業構想を実施してから10年がたつ2008年のことです。

過疎と高齢化がますます進み、耕作放棄地が増えてきた中、「百姓百品」の出荷者として頑張ってきた世代も徐々に年を取っていきます。

「百姓百品」のよさは、高齢の小規模農家、女性農家の営農対策という部分が大きいのですが、どうしても自分たちでできる範囲での栽培とな

ると、年間を通して潤沢に野菜ができるわけではないのが現状でした。店頭に並ぶ野菜が少なくなる時期がある中で、耕作できなくなった土地を何とかしてほしいと農家から要望

百姓百品の価値

- ①高齢者・女性などの小規模農家の営農対策
- ②系統出荷などの補完的役割
- ③安全な農産物の生産
- ④都市との交流

28

今まで、そしてこれから

生産し出荷することが生きがいであることはもちろん、地域貢献、地域農業の活性化、耕作放棄地の減少、医療費の削減にもつながる。

お迎えが来ても「百姓百品の野菜をつくらにゃいけん、せわしい」とお迎えを追い返し、野菜を作ろうではありませんか。



29

百姓百品村のはじまり

あるとき、地域からの「耕作放棄地をどうにかしてほしい」という相談があった。

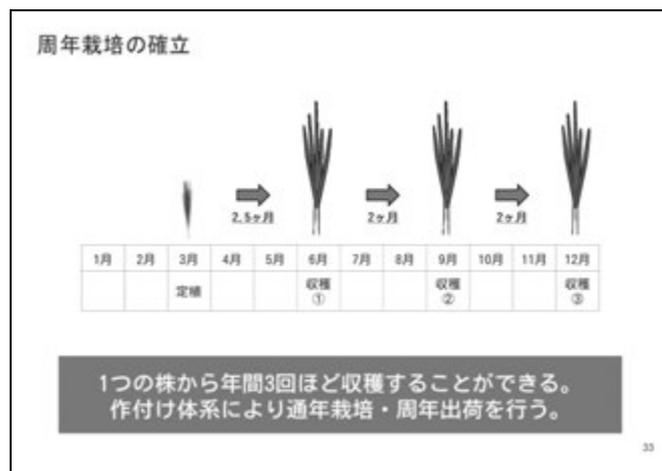
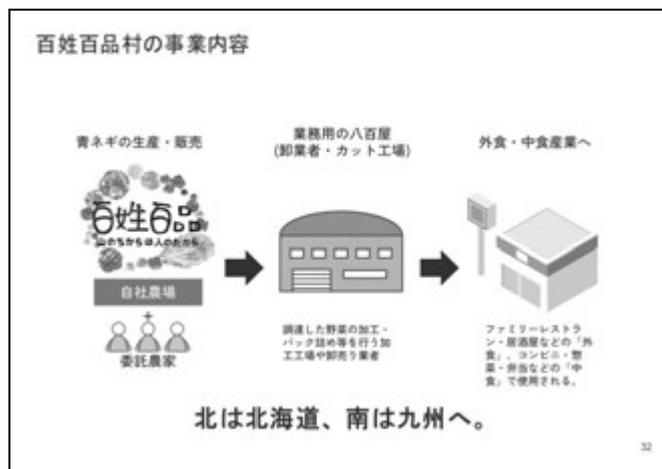
耕作放棄地を借り受けて、自社で農産物の生産を開始しよう！足りない野菜を作るぞ。



2008年に農業生産法人 株式会社百姓百品村を設立。

31

があり、それなら自社で農作物を作
 っていこうということで、「百姓百
 品」の中の有志6名が出資金を出し
 て作られたのが始まりです。最初は
 大根、キャベツ、レタスなどのたく
 さんの品目を作っていました。作っ
 て出荷するまではよかったです。中
 には百姓百品村が野菜を出したら、
 自分の野菜が売れなくなるという農
 家からの声も出始め、小規模農家と
 競合したらいかんと次第に考えるよ
 うになり、農業法人を立ち上げたこ
 とで、地元の野村高校卒業生を数名
 雇用し、若い職員で試行錯誤した結
 果、ちょうど時を同じくして2008年
 には中国の毒餃子事件を機に野菜の

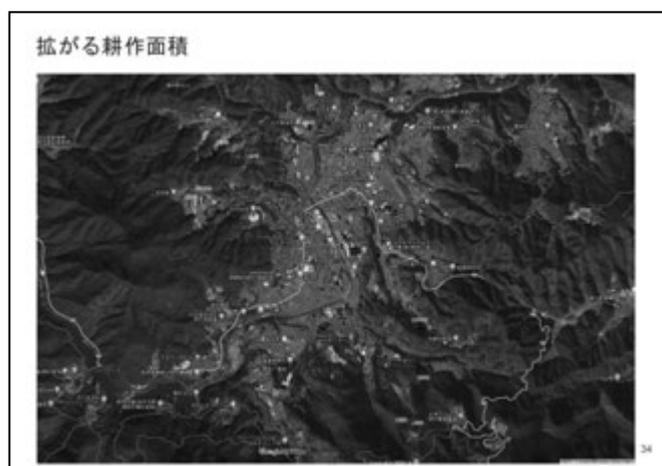


国産志向が顕著となり、香川で栽培が盛んだった青ネギの栽培をしないかと声がかかり、
 昼、夜の寒暖差が比較大きい野村町は冬も余り積雪がないことから、通年栽培が可能な青
 ネギの栽培に方向転換することになりました。

今年で青ネギ栽培に特化して10年目を迎えます。主に業務用、加工用ネギとして、北は
 北海道、南は九州へ全国30社ほどと取引を行い、青ネギはメイン食材ではないものの、薬
 味や料理の彩りとして欠かせないものであり、季節やトレンドを問わず需要があります。

常に需要があることから安定出荷
 が求められます。図のような基本の
 作型を組み合わせながら栽培をする
 ことで周年出荷できる体制を作り上
 げています。このことは安定した雇
 用を生み出すことにもつながってい
 ます。

出荷の拡大、また地域の方からの



耕作依頼もあり、年々耕作面積を拡大してきました。小さくて見えにくいのですが、黄色く囲ってあるのが耕作圃場です。今では町内に転々と20カ所、8haに拡大しています。条件不利地から貸し出される傾向にあることから、山々にあり、圃場が分散化してしまうというデメリットもありますが、一方では台風や病害虫などにより一斉に被害をかぶることがなく、リスク分散ができるというメリットが発揮されています。今年度には農地中間管理機構事業による圃場整備が完了予定であり、30haの整備地のうち、約17%である5haを百姓百品村が耕作する予定です。このことで地域住民からは獣やマムシが出なくなり、環境がよくなると期待の聲が上がっております。

また、2018年7月に起きた西日本豪雨では、ここ野村町でも多くの方が被災されました。グループ全体でも、死傷者こそ出なかったものの、事業所や事務所、圃場の水没により、総額3,500万円にも上る被害を受けました。町内全体では、土壌の流出や土砂崩れ、農道や水路の破壊、破損などが多くの場所で起きました。このことにより、耕作意欲の落ちた農家さん、農地の修復を高齢によって断念した農家の方から耕作依頼があり、面積を増やしたという経緯もあります。



生産拡大を図るためには販売力の拡大も欠かせません。西予市の市産品販路拡大支援事業を活用し、毎年、年3回ほど東京や大阪など大都市圏で開催される展示会に出店し、お客様を獲得してきました。

全国18都道府県、30件ほどの業者様に向けて毎日青ネギを出荷しております。



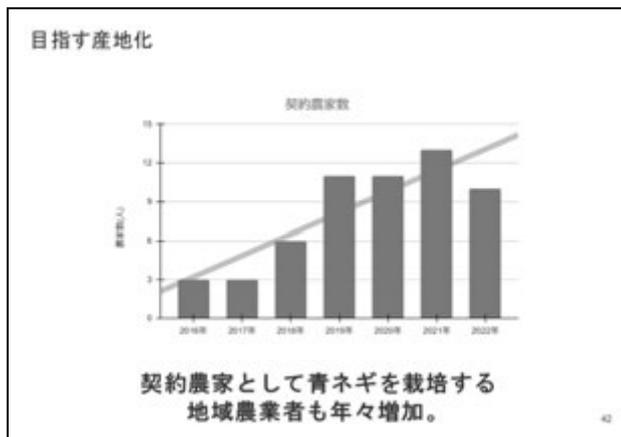
写真では一部の紹介になりますが、県内うどんチェーンの大介うどんさんや、全国チェーンの飲食店様、カット工場などを経てコンビニなどのうどんのメニューなどにも使用されるようになりました。



2013年度には2,000万円ほどの売上でしたが、現在では1億円を超えるような売上になってきています。

社員7人で栽培管理を行い、育苗と出荷調製作業は当グループの野村福祉園に作業を委託しています。

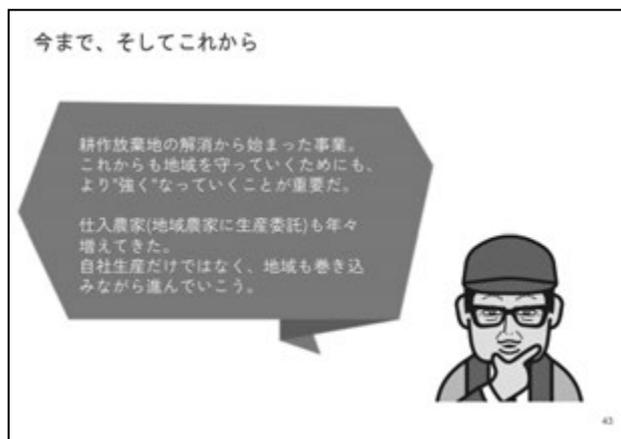
周年安定生産に向け、労働力削減効果が期待できる生育収穫予想システムの



の開発、普及と、ITの活用を積極的に行い、働きやすい環境作りに努めています。

社員の平均年齢は29歳と若く、活気があり、社会経験不足を補うために社内での研修機会を積極的に設けています。また、地元出身の愛媛県農業大学校卒業生も積極的に受け入れており、社内での栽培技術の習得や経験を積んだ後、百姓百品村の契約農家として独立する道も用意しております。現在、2名の元職員が独立就農し、今後もグループとして栽培技術、経営面でのサポートを継続して行なっていくことで、将来、地域の中心的な経営体に成長することを期待しています。令和4年の基幹的農業従事者の平均年齢が68.4歳という中において、百姓百品村の職員の平均年齢は29歳で、そのうち、20代が半数以上を占めています。

また、市内のみならず、市外、県外からの移住、転居者も多くおり、県内においても就職先として認知されつつあります。会社としては若い力を活用しつつ、地域においては雇用の創出と地域農業者の育成という役割を担っています。契約農家制度を2016年から始



め、口コミで広がり、年々増加傾向にあります。キュウリやピーマンなどを農協出荷していた農家が大半を占めています。収穫したものを持ち込むだけとなっている点が作業軽減となり、その後の調製、出荷作業は弊社で行なっていることから、大きな投資をすることなく、手軽に挑戦することができるかと好評をいただいております。多い方では年間30万円ほどの売上がある農家さんもあり、年間の総買取額は1,200万円ほどになっています。

これからも地域の基幹農業者として地域農業者を巻き込みながら産地化を目指して、地元農家とともに歩んでいきます。

続いて、最後となりますが、三つ目の会社、野村福祉園になります。百姓百品村の創業から5年後の2013年に、障害を持った方をアルバイトとして雇っていると、それを見た地域の方からB型作業所をしてみてはという話が持ち上がり、現会長の和氣数男が公務員



時代に、野村学園という指定障害者支援施設に従事していた経験があったことから、年齢や体力などの面で雇用契約を結んで働くことが困難な方が軽作業などの就労訓練を行なうことができる福祉サービスを開始しました。厚生労働省の統計によると国民のおよそ7.6%が何らかの障害、身体、精神発達を有しているという数値が発表されております。それを西予市で換算すると、人口3万5,000人のうち2,600人、野村町で考えると、人口7,200人のうち550人が該当すると推定されます。その全員が未就労ではないにしても、中には能力があるにもかかわらず活躍できていない方が数多くいると考えております。近年では、障害者雇用の必要性も挙がっていますが、地方においては余り活発ではないのが現状だと思います。しかし、人口減少、高齢化が特に進んでいる地方において、貴重な働き手として活躍することが期待できます。そうした中、「百姓百品グループ」としても事業拡大をしていくタイミングで新たな担い手確保を一つの目的として農福連携の体制をスタートさせました。

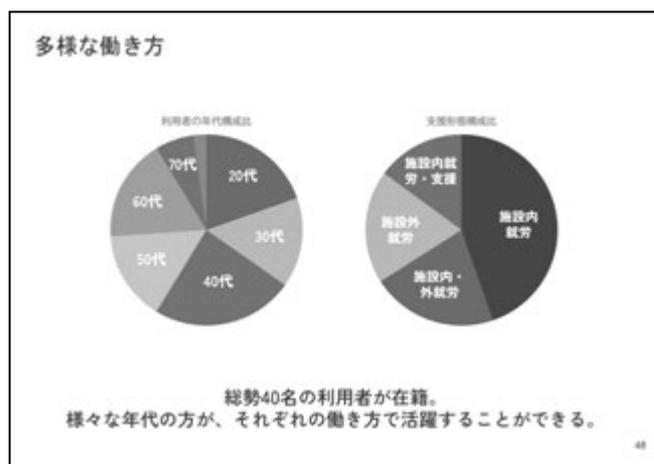
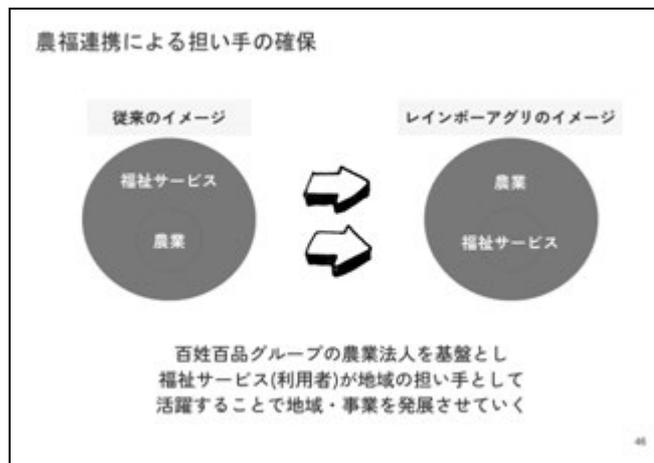
2019年には農林水産省を中心として農福連携の活動が本格化され、徐々に知名度を上げ、幅を広げてきていますが、「百姓百品グループ」が取り組む農福連携の推進体制は図のような形になっています。従来は福祉サービスの活動の一つとして農的作業を行なうというケースが多かったのですが、「百姓百品グループ」ではすでにある2社と連携することに

より、農業の担い手として利用者の方が活躍できる環境となっています。

仕事の一つとしてあるのが百姓百品村から作業委託された青ネギの栽培、及び調製、出荷作業です。利用者は個々の症状や状況に応じてさまざまな仕事を担っています。屋外での栽培作業では体力がある人、自律的な作業ができる方が活躍しています。危険を伴うような機械作業では補助的な役回りに回ることもありますが、定植から、草引きや草刈り、収穫などの多くの作業を百姓百品村職員の指導を受けながら行なっています。調製、出荷作業では体力の少ない利用者が主となっており、職員

のサポートを受けながら仕事をしています。作業手順や留意事項はわかりやすく図や写真にして掲示したり、声かけやコミュニケーションを積極的に行なったりして、協調性を高め、利用者が抱える不安や、孤立感の解消に努めています。

現在、サービスを利用されている方々は総勢40名にもなり、下は20代から上は80代と幅広い年代の方がいます。右の円グラフは支援形態の名称になりますが、前述したように屋内で働く方、屋外でも働く方、支援の手厚さなどに分けられており、能力に合った仕事と環境で活躍されています。

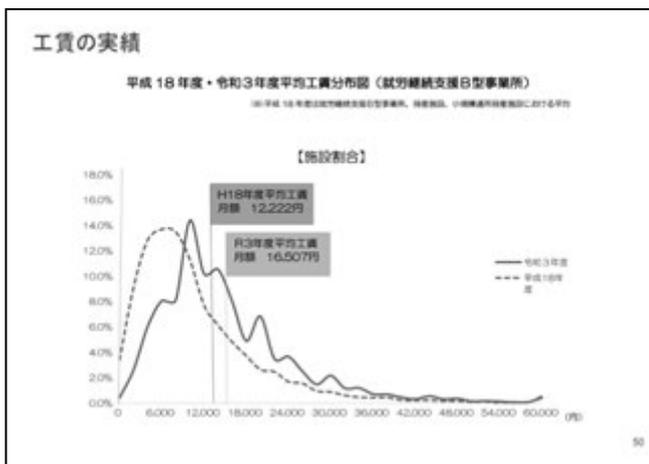


働いている様子の写真です。

野村福祉園は障害者の自立と暮らしを支えることも設立の目的の一つとしてあり、工賃は1人5万円を目標としています。そんな作業に係わる利用者のモチベーション維持につながっているのが働いた分の収入がえられるというところにあります。



事業所での工賃は地域によってばらつきはありますが、障害者の平均月収は2万円、西予市の地域では月1万5,000円という中であって、野村福祉園では3倍近くの月4万円の報酬となります。毎月の工賃と障害者年金と合わせて10万円あれば、地域での自立につながるという目標によ



って設定された金額です。この安定した作業量を確保できているのはグループ間での連携により安定した仕事を生み出せていることにあります。

B型作業所を開所して約10年。一般就労に移行した利用者さんはこれまで5名となりました。地域での認知度も上がり、支援学校を卒業後はここの作業所に通いたいと、卒業後、来てくださる利用者さんも増えました。また、地域の方からは「地域で孤立し、人に出会って物も言わなかった子が挨拶するようになった」、「町の中をうろうろしていた子が一日じゅう作業できるというのは考えもしなかった」、また親御さんからは「母の日には毎年ハンカチや靴下をもらっていたが、作業所に行き出してから回転寿司に連れて行ってきて本当にうれしかった」、利用者さん本人は「ガソリン代まで親にもらっていたが、工

今まで、そしてこれから

国内全体を見ても、人口減少・高齢化が進んでおり、担い手不足は大きな問題となっている。

利用者の存在価値は大きい。これからの地域の一つの大きな戦力として活躍していこう。

81

賃を稼ぐようになり、ガソリン代はもちろん食費を家に入れることができ、自分自身に誇りが持てるようになった」と、働く楽しさを感じているようです。

このように、人口減少、高齢化が進行している地域では障害者さんの存在価値は大きく、大きな戦力となっています。野村福祉園は訓練を通して利用者さん自身がやりがいを見つけ、さらには地域社会の一員として生きるための地域の理解と協力の輪を広げる地域づくりを担っています。

最後になりますが、以上のように「百姓百品グループ」では地域の課題に対して3社がそれぞれの強みを活かしながら、地域の方を巻き込み、地域づくりを行なっております。「保護よりチャンス」、この言葉を合い言葉に一人一人が自立した社会生活を送れるような仕組みを「百姓百品グループ」は築いてきました。小さな、小さな小屋での販売から始まった「百姓百品」は今年で25年。農家さんの粘り強さを頼りに倦まず弛まずやってこれ、四半世紀が過ぎました。これまでも数多くの課題や壁にぶつかりながらも、何とか地域住民と肩を寄せ合いながら乗り越えてきました。これからも3社一丸となって「地域の課題を農業で解決する」集団として邁進していきたいと思っております。

以上で発表は終了とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。（拍手）



保護よりチャンス

-決意-

“いなか”にとって“農業”は大きな産業。
そんな産業を支える存在として
町のインフラとして
「地域の課題を、農業で解決する」集団として
これからも、邁進していきたい。



○司会 井上様、どうもありがとうございました。ここで若干の休憩の時間を取ります。少し時間が押しておりますので、5分ほどしたらお戻りいただきたいと思います。できましたら、2時50分には再開したいと思いますので、よろしく願いをいたします。

(休 憩)

○司会 短時間ではありましたが、それでは再会をいたします。これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして福与先生をお願いをいたします。

【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 福与 徳文

それでは、パネルディスカッションを始めます。

ディスカッションを始める前に、パネリストの皆様を紹介します。まず百姓百品グループの和氣數男会長です。それから野村福祉園の井上桃子代表取締役です。冒頭にご挨拶いただきました管家一夫西予市長です。それから、愛媛大学社会共創学部の竹島久美子先生です。竹島先生、何か一言お願いします。

○竹島（コメンテーター） 愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科農山漁村マネジメントコースの教員をしております竹島久美子と申します。西予市さんは学生が授業や課外活動で活動させてもらっていて、とてもお世話になっています。野村の横林という地区に私も何度も訪れたことがありまして、今回、この場で「百姓百品」さんのお話を聞けることをとても楽しみにしておりました。今回、長きにわたる活動のもと、成果が実を結んで天皇杯の受賞となられたこと、誠におめでとうございます。本日はよろしく願いします。

○福与（コーディネーター） それから、農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会のNHK財団・畠山智之委員です。畠山さんからも一言お願いします。

○畠山（コメンテーター） 今はNHK財団というところですが、元NHKアナウンサーの畠山智之と申します。新人時代に北海道の帯広からアナウンサーの仕事始めて、当時は一村一品運動がずいぶん盛んでした。1981年でした。多くの市町村がいろんな産物を作ったのですが、大体がナチュラルチーズであるとか、ジンギスカンの肉の加工品とか、似たようなものばかりを作って、失敗作も多かったのです。その頃からむらづくりは何が成功して、何が失敗のもとになるのか、それを心の中に置きながら、全国のNHKでアナウン

サーとして仕事をする一方で、地域のむらづくりというものを勉強してきました。今回、そういう視点でこの野村町にもお邪魔していろんなことを学ばせてもらいましたので、後ほど紹介します。よろしくお願いします。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、ディスカッションをはじめます。まず、天皇杯受賞後、地域の反響とか、地域に変化があったのかどうか、和氣会長からお話しいただければと思います。

○和氣（業績発表者） 反響は、受賞後、すごくたくさんあったのですが、ちょっといろんなことがあり過ぎて、まだ祝賀会もやっておりません。恐らく4月後半ぐらいになるんじゃないかと思うのですが、それを伝え聞かれた農家の方は大変喜んでおられまして、時々、天皇杯を見に来られる方もおられます。ジワジワと喜びが広がっている状況だと思います。恐らく受賞後、もっと大きな反響になるんじゃないかというふうに思っております。今のところ、以上です。

○福与（コーディネーター） ジワジワと喜びが広がっているということですが、天皇杯の本物が会場に飾られていますね。

○和氣（業績発表者） あれを受賞するときに、くれぐれもそこに酒を入れては飲まないようにという注意を10回ぐらいされました。

○福与（コーディネーター） 会場の皆さんも、拜んでいかれるとよいと思います。

それではディスカッションに入らせていただきます。「百姓百品グループ」は販売部門と生産部門、福祉部門の3部門が連携している点がすごく良いところなのですが、まずは一つ一つの部門でどんなハードルがあって、それをどう乗り越えてきたかという点を確認させていただきたいと思います。

まず産直事業について、「百姓百品」の取り組みですが、和氣会長から、いろいろな点でご苦労をされているかと思えます。それをどう乗り越え、事業をどのように離陸させていったのかについて、お話しいただければと思います。

○和氣（業績発表者） 先ほど畠山先生が言われました1980年代ぐらいから全国の中山間地域に広まった一村一品運動、そういったものが下敷きになりまして、当時、野村町内の中でも一番過疎化、高齢化が進んでおった惣川地域を中心に始まりました。町の職員が主なのですが、惣川地域に行って、いろいろな話を地域の人とする。それから行政も一般行政職の村おこし対策室というものを作りまして、過疎化、または活性化のために努力せよというようなことがありまして、非常に意識的にそういった運動を起こすような方向にな

りました。そうこうするうちに、町長がかわりまして、新しい町長は前の町長のやり方を引きずるのが嫌だったのか知らないが、この対策室を一般行政の中から社会教育部門に移したわけです。社会教育といいますと、公民館が受け持つことになるのですが、私もちょうどそのときに公民館に配属されまして、好きなことをやれと言われたので、これに非常に興味があったので、村おこし を選びました。

その中で、いろんなところに先進地視察に行きました。一番目に付いたのが特に九州で始まった大分県の一村一品運動、それから宮崎県の綾町とか、そういった産直所を見まして、「これだな」というふうに思いました。それはなぜかといいますと、高齢者や中山間ではなかなか投資することがむずかしいのですね。要するに産直所さえあれば、自分たちが作ったものを販売できる。先進地の農家が喜んでいるように、何とかなるのではなからうかということ、持って帰って、仲間にいろいろ話をして、とにかく農家に行っている話をして、やろうじゃないかということ、二、三年やってから行政に提案したわけです。でも、実際、なかなか社会教育の面でそんなことをしてもいいのかというふうな意見もあつたりしたのですが、何とかやろうということで始めました。

実際、実験的にやったら、先ほど報告もありましたように反響はあつたのですが、町内でやっても、人口五、六千のところでも大したことはないだろうというふうに考えまして、どうせやるのなら県内で一番消費力のある松山でやったらどうかということ、提案して、それを上のほうに報告したのですが、最初はなかなか許可がなくて、1年止まっておつたのですが、それほど言うのならやってみようということで許可が下りまして、一定の予算をもらってから松山市内で産直を始めました。私、松山ではいろんなことをやっているだろうと思って行ったのですが、実際にはうちが初めてでして、マスコミもすごく反響がありますし、お客さんもたくさん来ていただいて、かなり話題になって、いいスタートを切ったわけでございます。

そういった中でいろいろなことがあつたのですが、やはり思いつきでスタートしたような状況だったので、生産計画も立てていないというようなことで、二、三年すると、どうしても山、谷があつたりして、一、二年はちょっと苦労しました。そうこうするうちに、もっと本格的にやろうということになって、新しい売り場を探してえひめ生協のインショップということにたどり着いて、そこからやっとな波に乗れたという状況なんですね。

話が飛んでしまいましたが、そういったことで何とか波に乗りまして現在に至っているというような状況です。

○福与（コーディネーター） インショップにたどり着いたという点について、もう少し聞かせてください。

○和氣（業績発表者） われわれがやっておった、すぐ近くにえひめ生協の東本店というスーパーがあったんですね。そこの店長がわれわれがやっていることをよく見に来ておられて、実は東本店という生協自身の成績が非常に悪くてどうしようかと思っていたと。それで、われわれが特に杵つき餅の実演販売をしたり、活発にやっているのを見ておられて、向こうも何とかうちとの関係を持ちたいなと思っているときに、私も事前に何も連絡せずに飛び込みで店長に会いに行きまして、「どうか、おたくの駐車場の一角でもいいから貸してくれないか」と言いますと、向こうも1月ぐらい考えて「ぜひ一緒にやりませんか」と言ってこられて、えひめ生協のスーパーの中で始めることになりました。「ここでやってください」と言われたのがスーパーの中の一番のメインといいますか、青果物のすぐ横でやってくれと言われたのです。私もびっくりしまして、大丈夫かなと思ったのですが、お客さんが開店と同時にゾロゾロと来てもらいまして、あっという間に生協の売上が増えたと。野菜だけではなくて、そのほかの売上也増えたということで軌道に乗ったという状況です。条件も非常によく、私たちを大事にしてくれて、生協の売上一緒にわれわれの売上也伸びてきたという状況が生まれて、やっと波に乗れたということから今につながっております。

当時のお客さんが非常にひいきにしてもらいまして、開店する前には大体30人から50人並んでもらって、開店と同時にドッとお店に駆けつけてもらうような状況が生まれまして、私、これを見るたびに感激をしまして、みんな、「百姓百品」を歓迎してもらっているというふうに映って、非常に元気になったことを今でも覚えております。これが今も続いております。お客様のおかげです。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。むらづくりの方法として産直に動きはじめたのは、高齢化が進んでいて投資が少なくても何とかやっていけるからということ、それから生協のインショップで産直を行ったという点は、生協の販売が落ち込んでいた際に、生協側も産直と連携して販売増をはかろうしていたことなど、両者の利害が一致して、うまく連携が取れたことが明らかになったと思います。

そもそもの始まりは、和氣会長が担当の町役場の職員だったということもありますが、行政の力があったということでした。行政的な支援についての話でもいいですし、こういった「百姓百品」の動きが地域に与えた影響でも構いませんが、管家市長から産直事業に

ついてコメントをいただければと思います。

○管家（コメンテーター） 産直市の関係では、市内でも「百姓百品」さん以外にも、「どんぶり館」とか、道の駅とか、いろんところでそういう活動をしているのですが、そこに出していただく方というのは、大体、家庭で自分たちが野菜を作って、それが余って、それを自分から値をつけて商品を出す。それが売れて、それが励みになって広まっていくというような感じが市内ではあるわけです。その中でも、先ほども言われましたが、地域だけではだめだ、やはり消費地、愛媛で言えば松山にという、その発想と行動力というのは「百姓百品」のすばらしいところであって、それに多くの地域の高齢者の方や女性の方、また専業農家の方もそれに入られて広まっていくということで、大変すばらしいことだと思います。

今、コープえひめのお話をされましたが、先日、コープえひめ的美濃理事長が来られて「百姓百品」の話をして、先ほども言われておりましたように「開店前にザッと並んで、新鮮な野菜を買って家に帰る、そういうような状況ですよ。今も大変お世話になっているのですよ」というような話がありましたが、高齢者、平均的に70歳を超える方が多いのですが、生産者の方、やはり健康や生きがいにつながっているなというふうに思っております。このことが地域の活性化に貢献されているとともに、野村、西予という地域をPRしていただく、知っていただく、そういう大きなものがあると思いますし、田舎のなつかしい故郷の味ということを提供していただいているということもあわせて感謝しているところであります。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。次に竹島先生から、地元の専門家の立場からコメントをいただければと思います。

○竹島（コメンテーター） 専門家というほどでもないのですが、私自身は2020年から愛媛に来ておまして、愛媛に来てびっくりしたのは直売所、産直市の多さでした。JAさんがやっているものもありますし、百姓百品さんのようなインショップ型のコーナーもあります。それはなぜかな、こういう理由かなみたいなものを考えながら今日聞くことができます。冒頭、少し触れたのですが、西予市では学生を積極的に受け入れていただいています。というのは、私が所属しているコースでは学生と地域の間で協働的な活動を行なって、地域の課題解決に役立てようという演習の科目がありまして、私以外の教員も学生を連れて行って、地域の皆さんと一緒に活動をさせてもらっています。受け入れていた

だいている地域に、途中のスライドにもありましたが、横林地区という場所があります。そこに出かけたときには「百姓百品」の集荷場が、横林地域づくり活動センター（旧横林公民館）にあって、そこにカートを設置しているのだなと気になっていました。おもしろいと思うのは、集荷のカートなのですが、松山のお店が5店ぐらいありましたが、お店ごとに集荷場のカートが異なるようなのです。出荷者が自分はどこのインショップに出荷したいかというのを熟慮して選んでいるということらしいのです。ということは、生産者の一人一人が1人の経営者、あるいは「百姓百品グループ」で言う百姓として戦略を立てて出荷先を選んでいるというのが、とてもおもしろいんじゃないかなと思います。

また、栽培計画や出荷先を検討する際には、出荷先ごとのデータも活用していると思います。生のデータとして、どこでどれだけ売れたという出口のデータが比較しやすい販路を持っているということは、同じ「百姓百品」の出荷者の1人であったとしても、その中の一人一人が、データを活用して自分の得意不得意とか、自分が栽培している土地の条件とかも考慮し、自分自身でブランディングができる材料になっているのではないかなと思います。

これがもしDXとか、スマート農業とか、AIなんて流行りのフレーズで、何かできそうな気が研究者としてはしてしまうのですが、きっと多分、そういうコンピュータを通さなくて、生のデータと一人一人の人間が向き合って、ああしよう、こうしよう自分の頭で考えて実践しながら次の新しいことに取り組めるということすごく重要なのではないかなと思っております。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。90歳以上の高齢者にはDX化はなかなか困難かもしれません。しかし、高齢者自身が頭を働かせて、いろいろな戦略を練って出荷先を決めているということ、今初めてお聞きしました。なかなかおもしろい話だと思います。

それでは、審査委員でもあり、取材もされている立場から、畠山委員からコメントをよろしく願いいたします。

○畠山（コメンテーター） この選考に当たって、事前に野村のほうにお邪魔したときに一番びっくりしたのは、生産者の方が何人か来てくれたのですが、82歳の方が「おれは売上で負けた」と言うのですよ。負けた相手は90歳です。90のおじいちゃんが出していたサツマイモがトップ5に入っているぐらい売れているらしいのです。もっとびっくりした

のは、そのおじいちゃんはサツマイモ専門農家かと思ったら、そうではなくて、もともと煙草の葉の生産農家だったそうです。でも、煙草ももう売れやしないからと、普通だったら諦めるじゃないですか。その方は周りから「じいちゃん、昔、サツマイモとか作っていたでしょう」と言われて、サツマイモを身の丈で作って出したら売れているのですよ。これはすごいと思いませんか。無理していないのですよ。身の丈で、みんなが、自分ができるものをちょっと出す。しかも、おいしいと言われたから、もう少したくさん作ってみようかなと思った人が村全体にいるという形ですよ。これが「百姓百品」なんですよ。本当に量は少ないかもしれませんが、その身の丈が100人、200人集まると、どれだけの一大生産地になるか。これがこの野村のほかのところにはない産直の良さというふうに思いました。

あと、詳しくは後ほど話します。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。今、畠山委員が述べられたように、皆さん、身の丈に合わせた取り組みで、ほんの少し背伸びをする程度。それだけでは食べていけないけど、年金プラスアルファの収入があって、90歳になったって「おれはちゃんと所得があるのだ、あいつに勝ったのだ」と。やはりそういったところがないと、皆さん、生き生きとしていけない。そういう仕組みを築かれたのはすごいなと思いました。

その一方で、若者が地域で生計をたてていくためには、それでは不十分だということで、次に立ち上げられたのが農業生産法人の百姓百品村の取組です。そこで若者も食べていけるという仕組みをつくったところが、百姓百品グループのすごいところだと思います。まずは耕作放棄地が出てきたから、それを何とかしなければいけない。若者が生産して売上げを上げて、それだけで食べていける企業的经营体をつくることを目指されたと思うのですが、それに関しても、まず和氣会長からいろいろ苦勞された点とか、それをどんな工夫で乗り越えていったのかについてお話いただければと思います。

○和氣（業績発表者） 今になったら、かっこういいことが言えるのですが、実際、始めたきっかけは、私が持っていたハウスの近くに1haぐらいの畑を持っておられた方が自己破産的な感じで、もう辞めるから何とかしてくれと来られまして、当時始めた産直の仲間とも相談して、それでは農業生産法人を立ち上げて、産直に不足したものを作ろうかということで始めました。しかし、やってみると大変なことだったですね。野菜を作って販売して、そこで働く人の給料を払うということはものすごいことで、私も深く考えずに、恐らく深く考えてよく計算したらやらなかったのじゃなかろうかと思うのですが、それを始

めたばかりに、次から次に、うちのも使ってくれというようなことになって、本当に4、5年は大変でした。うちの嫁さんにえらい迷惑をかけたのですが、その中で、やはり引き受けた以上、何とかしなければいけないということでいろいろ研究をしました。

県の普及所の方やいろんな方にも相談をして、業界にも出かけて行ってやったのですが、いろんなことをやってもだめだ、ターゲットを絞ってやろうということで始めたのが、いわゆる青ネギの生産でした。これは年中販売ができるし、真冬でも少しですが、成長するのです。農閑期、農繁期がなくて、雇った方も年中仕事ができるということで、これに絞った。あとは売り先ですね。いかにして売るかということをいろいろ勉強しまして、やはり県内とか、近隣だけではだめだということで、マーケットを日本中にターゲットを絞って、商談会に行って販売をするという方向に変えました。僕も一回だけ商談会に行ったのですが、やはりそこでいかに話をするか。とても僕なんかはできないので、横にいる井上桃子さん、当時来てくれたばかりですが、彼女に行ってくれと言いますと、やはり若い女性が話すとう違うのですね。そこで、これだなと思って、私はそういった面には一切手を出さずに、若い人にやってもらうということで、徐々に売上が増えていきました。恐らく2、3年ぐらいで8,000万ぐらい彼女は増やしたのじゃないかと思うのですよ。そういうことで、それぞれの得意分野でやっていくということ。あとは若い社員で非常にパソコンに堪能な社員がおりまして、いろんなデータを集めては計算し、方向性を出してくれたので、農業生産法人も前へ向いてきたのではなかろうかと思うのです。

でも、農産物はわりとこれがいいのだとなると、ものすごく早いスピードで競走相手が現れるのです。今はその点で苦労しているのですが、やはり我々は地方におりますから、大都市に向けて出荷する場合、輸送コストがかかるのです。ですから、この面で主な競走相手は香川とか、徳島が多いのですが、われわれは1.5倍ぐらい余分にかかっております。そこら辺のコストもいかにするかというのは、いろんな計算を立てながら、あとは効率よく物を作って販売するという方向を若い人でやってもらっております。とても、私のような喜寿を超えた人間の考えることではないので、この点はやはり若い人にこれからもやってもらおうと思っております。

それで、全国でよく見ておりますと、地域おこし協力隊で農業に来て働いておられる方が非常に多いのです。私どもの地域でも農業生産法人があるのですが、よく見ると、案外地元の人はいないのですね。よそから来た人がやっている。「無茶々園」なんかもほとんど地元はだれもおられませんと言われたのですが、やはり広い範囲から農業に入って働いて

もらっている。そういう受入れの素地をこれから作っていかねばいけないのではなかろうかなと思っております。

○福与（コーディネーター） 井上さん、何かお話しいただけますか。

○井上（業績発表者） 大部分は会長がお話をしてくださったのですが、耕作放棄地という面で言うと、創業当初、ほとんど自社の農地がないので、1 haの農地が手に入った。でも、それだけでは面積が足りないというところで、どんどん「貸して、貸して」と地域の中にお話を持っていくのですが、借りられる土地が本当に車で30分行った山奥とか、大きい車が余り入れない、小さい、1反もない畑とか、3畝みたいな畑とかが多くて、多いときには200圃場ぐらいありまして、先ほどスライドで病害虫のリスク分散ではすごくいい面があるという反面、どうしても労務費はすごくかかっていることもあって、今では毎日のように、この畑を使ってくれないかという話がたくさん来て、「ちょっとごめんなさい。一旦、車が入れるかどうか見てみるね」と言いながら、1反以下の畑はお断りしているという現状になりました。最初はやはり畑の面で苦労しましたが、今ではそんな偉そうなことを言ってしまうので、その辺、地域の方には少し申し訳ないなと思っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。先ほどから聞いていると、まず和氣会長が後先を考えずに動き出すところから始まって、だからこそ、新しいことが始められたのだと思います。その点、奥様にかなり苦労をかけたということですが、会場の奥様、何かおっしゃりたいことありますか。大丈夫ですか。

今、放棄されそうな農地を、あちこち引き受けていたら農地が分散して大変だったというのを聞きました。そして、現在、なかなか受け切れないという状況になっているということです。耕作放棄地の問題など、土地利用の問題は行政にとってはかなり大きな問題かと思うのですが、農業生産面の百姓百品村について、管家市長からコメントをいただければと思います。

○管家（コメンテーター） 今、和氣会長さん、井上さんが言われたように、私どもとしては多くの耕作放棄地を借り受けていただいたことが行政としてはありがたかったなと思います。今言われたように、野村の中心部から行くと、山奥のところ結構作業されている姿もお見受けをしまして、大変な思いをして借り受けられてやられたのだなと感じています。先ほどスライドにもありましたが、中間管理機構の関連の農地整備のところにも、農地をある程度確保されて、そこで広い圃場でやっていただくということがありますし、いろんな面で前向きであるということと、生産者、従業員がお若いという話がありました

が、百姓百品村から独立して、またネギ等を生産される方も何名か出ていますし、若い方が係わっていただいているのはありがたく、担い手の確保、育成に積極的に取り組んでいただいていることについて感謝をしています。

それと、私も一遍、「百姓百品」と一緒に商談会に行ったことがあるのですが、市内から7社ぐらい一緒に行ったのですが、一番にお客さんが食いついたのは「百姓百品」だったです。やはりそれはネギであります、あのときにはどこかのラーメン屋さんだったと思いますが、やはり目の付けどころがいいなというのは私たち行政も真似しなければいけないなと思っているところであります。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。現地調査に伺ったときにも、他の農家の作物とバッティングしないこととか、年中出荷できないと従業員に給料を払えませんで、そういった点から、今は青ネギにターゲットを絞って収益を上げているということを知りました。耕作放棄地解消の面でも、農業経営的な面でも、どちらでも結構ですが、竹島先生からコメントをお願いいたします。

○竹島（コメンテーター） また横林の話をしてしまうのですが、横林というところは地域づくり活動センター、西予市では公民館は地域づくり活動センターという形に組織替えをして、先ほど和氣さんから公民館で社会教育の部署が経済活動をするのは何ぞやみたいなことをちらっとおっしゃっていましたが、愛媛県は公民館の活動が盛んで、その活動をもう少し多面的な支援に回せるような形で改革していこうと、現在、西予市さんは先進的に頑張っていらっしゃるところです。その横林地区の公民館主事さんが、横林自治振興協議会という、農水省的には農村RMOをやるのだとか、地域運営組織で農村を振興していこうということで力を入れているところですが、そういった組織と大学生が協働して1月にモニターツアーを行い、私もツアー客として参加をしてきました。その際に百姓百品村が借りているネギ畑の横を通過して、グリーンツーリズム的な感じでシイタケの原木が積まれている山の中に行き、シイタケの収穫をさせてもらって来ました。当日の案内は「百姓百品」にも出荷をされている原木シイタケの農家さんにしていただいたのですが、その方には、この畑のネギは「百姓百品グループ」の会社のネギで、もう2度収穫したが、また育っているところだ、これからまた収穫するのだということを丁寧に説明していただきました。報告の中でも圃場が分散しているとおっしゃっていましたが、多分、それぞれ分散しているなりに地元の人とも情報を共有しながら、連携を密にしてグループのほうでは取り組んでいるのだなと改めて思ったところです。いざ、農業参入して農地を借りるとい

うのはハードルがあったり、借りてほしいと申し出があるのはありがたいが、ちょっと大変だみたいなお話を今回聞けて、やはりそうだったのだなと思いました。

ネギの専門的な栽培は、他県の事例でも聞いたことがあって、それなりに事業として成り立つのだなと驚いていたのですが、やはり対抗馬がいろいろ出てきて、愛媛から運んでいくのだと工夫も必要だ、でも、そこで若い力がとても役に立っているというお話を聞いて非常に勉強になりました。そういった農地を借りるとか、新しいことをしていくに当たって、よその地域から若い人が来てくれるわけですが、それを可能とするのは、受け入れる地域のほうも風通しのいい地域だからなのではと感じています。西予市に伺うと皆さん、明るくて、前向きな方とご一緒させていただいていることが多いので、そういった地域性がいろんな人の受入・定着につながっているのじゃないかと思います。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。最後に述べられた「風通しの良さ」という点は、ディスカッションの最後に触れたいことなのですが、お土地柄だと言われてしまえばそれまでですが、ありがとうございます。畠山委員から、青ネギの生産面に関して何かコメントをいただけますか。

○畠山（コメンテーター） ネギについては、先ほど福与さんがおっしゃったように、なぜネギになったかというところが一番びっくりしました。ほかのものを作ると地域の人たちと競合する。競合しないもので何かないかと考えたというところがすごいなと思いました。この点については皆さんが語られたので、僕は別の観点で言いますが、この「百姓百品」の農業生産は、食料自給率の向上を支えているわけではないのです。そんなにたくさん作っていません。でも、供給する側ではなくて、消費者から見ると、求めているものを作ってくれているのです。自分の求めるものの率で言うと、かなり充足しているものを出しているのです。百姓百品の産品は松山のコープでインショップで売られています。少量多品種ですから、一気に人気が出てしまうと、「百姓百品」の品はあつと言う間に品切れを起こすのです。でも、インショップですから、生協さんがそろえた野菜もあるのです。お買い物に来た人は品切れで帰るといことがないのですね。農村が朝取りした土が付いた野菜がたくさんある一方で、コープが仕入れ、照明を浴びて、みずみずしく並べられた野菜も、両方ある。その中で選びたいほうを選べる仕組みがうまくできていることによって、お客さんたちが求めるものを提供するという部分のベースができていると思いました。インショップではなくて、単独店舗では品切れが起きたときに、お客さんの求めに対応できない。インショップというところが少量でもちゃんと成り立つ仕組みのもとになってい

るような気がしました。これはすごく大きなことを言うと、僕は日本の農業の一断面だと思いました。日本はどうしても百姓一品になってしまうのですよ。米だったら米とか、自給率をバーンと上げるために、全国でコシヒカリを作ってしまう。そうではない中で、おれのところはこれだよということで出していくことによって生業ができています。それを作っていくことは日本農業にとってすごく必要だと思いました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは三つ目の部門である農福連携について議論していきます。和氣会長、あるいは井上代表から、野村福祉園を立ち上げていくのに際して、どんなハードルがあって、どのように乗り越えていったのか。それから、高い工賃を設定できている理由、先ほどの発表の中でちょっと触れていただきましたが、それについて、まず和氣会長からよろしく願いいたします。

○和氣（業績発表者） 先ほども言われたように、私、野村町の職員をやっております、当初が野村学園という知的障害者の施設で指導員をやっておりました。それから異動で一般行政職に回ったわけですが、その関係から障害のある人たちとはいろんなお付き合いを昔からやっておって、農業を始めたので雇ってくれないかと来られたのがきっかけで、いろんな農作業をしてもらっていたのですが、だんだん増えてこられて、作業所をやってみないかということをお勧められて作業所を開設しました。これをやって非常によかったのは、労働力としても非常に助かりました。当時は余り若い人が来てくれなかったので、収穫の関係で「朝6時ぐらいからやるのだが、来れる人は来てくれませんか」と言うと、大抵の男の子はみんな来てくれて、非常に頑張ってやってくれました。当時は1か月10万円を超えた人が二、三人おられたと思います。それだけ一生懸命来て頑張ってくれたし、仕事としても助けてもらったということは実感として残っております。

それ以上に私が良かったなと思うのは、いわゆる障害を持っている人はよく注意するとやはり地域で孤立していた方が多かったですね。仕事がなく家におったりとか、あちこち行ってぶらぶらしたりという人が多かったのですが、うちに来ることによって、工賃をもらうことはもちろんですが、「百姓百品」の農業生産で仕事をしようという、集団の中に入ることで自分の居場所ができて非常に安定をして生活、仕事できて、人間として成長したなということを私が一緒に仕事していて感じました。地域の方は「あの子、今ごろ挨拶するようになったよ」とか、近所の人にいろいろ話をすることができたとか、飲み屋に行くと、見た子がいるなと思ってよく見ると、生ビールを飲んでいたり、そういうことで、具体的にはなかなかあれですが、人として成長してきた。一つの集団の中に所属する

ことで成長できたなということを感じております。これからもずっと一緒に地域の中で生きていこうということで、そういった人は特によく熱心に仕事をしますし、そういう場を提供できたことは非常に良かったなと思っております。

あとは、だんだん年を取ってこられますと、やはり将来のことですね。今、グループホームのことを考えているのですが、早く安心できる場を作ってあげなければいけないのではないかなと考えて準備しているところがございます。いろいろ言おうと思うのですが、みんなの前にいると、なかなか言葉になって出てこないです。

○福与（コーディネーター） 井上さん、どうぞ。

○井上（業績発表者） 今、和氣会長が言われたように、本当に利用者の方々、月平均で4万円稼いでおられて、最近地域の方がよく言われるのは「あの子、あの飲み屋でお酒飲んでいたよ」とか、やはりお金を稼ぐことによって、地域に利用者さんたちがお金を落とすような循環する仕組みもできてきて、私たちの産直が野村町の乙亥会館の横にもあるのですが、そこでよくお買い物をする姿を見られたり、皆さん、稼いだお金をたくさん使おうという姿も見られて、これまた一つ経済が循環するいい点だったなということもとても感じます。

また、今、40人の利用者さんに利用していただいているのですが、男性、女性、お年寄りから20代の若い子、いろんな子が毎日コミュニケーションを交わします。いろんな人がいるので、どうしても衝突するときもあるのですが、職員のサポートによって、そういった衝突も無事に解決したりして、社会生活そのものを野村福祉園で過ごせるような仕組みになっていると思います。また、就労する訓練の場として機能するように、生活面ですとか、働いているときの職員との接し方や、他者との接し方を学ぶことによって、皆さん、本当に自立していける技が身につけていっているなど、とても強く感じております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。野村福祉園の取組、農福連携の取組、市長さんのお立場からコメントをいただければと思います。

○管家（コメンテーター） やはり三つの組織、特に百姓百品村からの青ネギの育苗と出荷調製作業を作業委託として福祉園がやられている。そのところで安定的な収入を得られて、そして先ほども言われましたが、2倍から3倍の賃金を同じような作業所に比べて支払われているということは、地域の障害者の皆さんにとってはこの場所で私も働きたい、そういう声も聞きますし、そしてそのことが地域での生活、ノーマライゼーションになっているのではないかなと思います。やはり自分の力で自分が働いた対価として手元にいた

だくお金というのはいろんな使い方ができ、また消費者として思うことは物を買ったり、先ほど酒場の話がありました、普通と同じように飲食ができる、そういうものにつながることでありますので、私としてはすばらしい活動であると。また西予市は福祉施設が結構あります。そして、グループホームとか、就労作業所、どちらかという、福祉的就労支援のB型の事業所もあるのですが、そういう部分でやはり社会福祉法人と社会福祉法人でない株式会社との共存の中で、お互いがいろんな刺激をしながら、障害者の視点に立った、そこに就労していただいている方の視点に立った運営ができるというメリットは大変ありがたいなと思っておりますし、市もそういうことに対しては協力していきたいなと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。和氣会長、どうぞ。

○和氣（業績発表者） 先ほど司会の方から工賃が高い仕組みだと言われたのですが、それはいわゆる普通の施設であれば、農業をやる場合は施設の中で農業をやるという感じですが、うちは同属会社のところに行って、そこでやるということなので、早く言えば、いわゆる工賃の設定が自分たちでできるということです。そういうことで、ほかの職員と一緒に仕事をしますから、仕事上も甘えることなく能力を発揮せざるを得なくなるというのですか、そういった意味で高い工賃が設定できると思います。以前はもっと高かったのですが、やはり障害を持っている人たちもだんだん年を取ってきますから少し下がったのですが、われわれのコンセプトは工賃5万円、年金6万で、10万以上の生活費があれば地域で生活できるのではなかろうかということでございますので、これだけは守っていききたいなと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。今、おっしゃられたように、健常者と同じ立場で働く。だからこそ、同じ水準の賃金が払える。ただ、お年を取られてきて、そんなに長く働けないので稼げなくなってきたという課題はあるものの、高い水準の工賃が達成されている理由がよくわかりました。これは非常に重要な点だと思います。そういった農福連携、今、いろいろなところで取り組まれているのですが、この件に関して竹島先生からコメントをいただければと思います。

○竹島（コメンテーター） 先ほど和氣さんのお話からも高い工賃が実現できているポイントを聞かせていただいて、なるほどなと思いました。結構、作業が大変だと感じる方もいらっしゃるのですかね。でも、その分高い工賃を得られるから頑張れる方たちが続いていらっしゃるのだなと思って聞いていました。農福連携については、私自身は、大手の株

式会社が自社で法定雇用率を達成しなければいけないところを、特例子会社を作って、そこでたくさんの方々に働いてもらうことで会社全体の法定雇用率を満たすような取組のことで調査には行ったことがあります。愛媛に来てからはまだそういった調査はできておりませんが、卒業論文で農福連携について取り組んだ学生がおります。農福連携、本当にここ10年ぐらい盛り上がってきている動きですが、卒論に取り組んだ彼女が、なぜ、農福連携に興味を持ったかというところ、農村部には障害者の方々の居場所となる場所がなかなかなくて、大人になったときとか、いろんなタイミングで、住み慣れた場所ではなく、町中に転居する形で移動しなければいけないということを目にして、彼女はそれをすごく残念に思っていました。でも、野村福祉園さんが農村部で起業をされたということは、農村部だからこそ、農業を通じてであれば働けるという方々の働き場を作ることができたのだと思います。ということは、その方たちはもしかすると、どこか別の場所に移らなければいけなかったのかもしれないが、働く場所だけでなく住む場所も同時に確保することができたということだだと思います。もしかすると、そういう働き場所があるから、よそから野村に来てみたいと思う方もいるかもしれませんが、いろんな地域にできていいのではないかなと思います。やはり、そのとき大変なのは理解のあるサポートといいますか、一緒に働く健常者という言い方もあれですが、そういう方たちがいかにサポートをして、しかし同時にお互いを尊重しながら働けるかどうかだと思います。となると、多分、人間的な適性だとか、つらいことも何とか乗り越えていける粘り強さだとか、能力というよりも、人間の中身としても鍛えられた人でないとできないかもしれないので、多分、人材がそういう意味で豊かでないと感じにくい内容かなとも思っております。ですので、農業の人手不足だからということで農福連携というのが注目を浴びているとは思いますが、人の確保という面は困難な面もあると思います。一方で、そういう働く上での大変さというのは、障害をお持ちの方も、私も含めたその辺で働いている人たちも一緒だとも思います。そういった働く面での同じ部分と、今、住んでいる一人一人の人間としては、もしかすると、愛媛にいても、松山にいても、野村にいても、可視化されていない人たち、障害を持っていて家の中にもってしまったり、どこかうまくつながれなかった形でいられない人たちも暮らしているのだということも改めて知ってみたり、考えてみたりして、一人の人間として一緒に働いたり、一緒に暮らしていくことが、小さな地域だからこそできるのではないかなとも思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。委員の立場からでも、取材した

立場からでも結構ですが、畠山委員、よろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター） 視察のときに私たちはネギの選別作業を拝見させてもらったのですね。収穫されたネギの長さを合わせて、枯れた葉っぱをはがして箱に入れるという作業を、障害者が担当していたのですが、そのときに僕はここの就労者は与えられた仕事を処理しているだけではないなというふうに思ったのです。つまり、就労継続支援B型事業所ですから、ちょっと生活困難というか、多少、普段の生活とか作業が困難な方が働いていらっしゃるのですが、みんなが工夫しているように見えたのですね。たとえばネギの長さを合わせるときに、1本1本何cmと計るよりも、二、三本ボンとまとめて机の上に置けば長さがわかるわけですよ。それで短いものを排除すればいい。そういう工夫をされている。なぜそういうことができるのかなと思ったのですが、先ほど井上さんが図示しましたよね。農福連携。野村の場合は福祉の中に農業があるのではなくて、農業の中に福祉があるのだ。しかも、和氣さんもおっしゃっていましたが、現場に行って仕事をすることによって、なかなか普通の就労では難しい人たちも自分の中で何かできること、困難を乗り越えようという力が生まれている気がするのです。乗り越えた結果、収入が入ってくる。自分が頑張ったことに対する報酬としてお金が入ってくる喜びがあるから、多分、飲みに行けるのだと思うのですね。そういう仕組みが、あらかじめ計算されたのか、それとも自然に生まれたのかわかりませんが、うまく動いているように感じました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。最初は行き当たりばったりというか、思わずやってしまって、次から次へとできていったということですが、結果として出来上がったものを我々が見させていただいたときに、やはり販売、生産、福祉と言った3つの部門が見事に連携している点が、まさに天皇杯を受賞した一番の理由だと私は思っています。今後、こういった事例を横展開するとき、いつも販売、生産、福祉というわけではなくても、一つ一つは困難であっても組み合わせるとうまくいく仕組みがありうるのだという点を皆さん意識していただくと良いかと思います。そこで、三部門の連携について、特に気をつけているところ、注力しているところ、何でも結構ですが、和氣さんからお話しただけだと思います。

○和氣（業績発表者） 特にそんなには考えないのですが、近くにいる人で仕事ができる人はみんなやりましょうということをそれぞれの職員さんが考えて仕事を作ってきたことと思います。ですから、今日はだれそれが休んだら、残っている者がカバーするというようなことで、障害があろうが、なかろうが、お年寄り、若いこと関係なしに、今できる人

は来てやってくれと。うちは障害者、高齢者、以前は外国人労働者もおったのです。ですから、いろんな

人ができる人は来てやりましょうという形でやってきたのです。なかなか計算どおりいかないのがやはり人ですね。恐らく市長さんが一番苦勞されているのが人口減少だと思うのですが、できる人は皆やりましょうという考えですかね。

○井上（業績発表者） 連携でいいますと、2018年に西日本豪雨がありまして、3事業所のうち2事業所が水没というか、水害にあいました。幸い、青ネギの出荷場の手前1mぐらいのところまで水が来たのですが、それ以上来ることはなく、1事業所だけ残りました。ほかの2事業所が水没してしまったので、その2事業所の事務員ですとか、職員が豪雨の日から青ネギの出荷場の小さい、狭い、本当にこのぐらいのところに10人ぐらいひしめき合って2年ぐらい過ごしました。その中で、3社の職員が狭い事務所、肩も付くぐらいのところ毎日事務をこなしていると、こっちの会社で何か問題が起きると、どれだけ小さい声で話してもみんなに聞こえるので、「あれ、これはうちの会社で解決できるね」みたいに話し合う空間になって、それがいい相乗効果をもたらしたということも一つあったかなと思います。それからレインボーアグリという作業所を新設したのですが、その後も3社のグループの職員は同じ事務所を使うようにしておりまして、できるだけそこでいろんな会社の問題をみんなで話し合っ、じゃ、どの会社で解決できるねというのを日々職員同士が情報を共有しているという点は、今、すごく大きくグループが連携できているところだなと感じています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。三部門が同じ事務所で仕事をし、情報共有している点は、今日、はじめてうかがったことで、複数の部門で連携をとっていく上で素晴らしい仕組みだと思います。管家市長、「百姓百品グループ」三部門の連携、販売と生産と福祉部門の連携、そういった点で行政の立場からどのようにお考えか、どのような切り口でも結構ですが、コメントをいただければと思います。

○管家（コメンテーター） 今、三つですよ。ひょっとしたら、これが四つ、五つになるかもしれないと思うのですが、やはりそこに何か必要というものを感じられて、そこから出発されて、組織が広がったのかな、これは大切なことであると思います。これは行政でも言えることであると。やはりそこに必要があるから動く。そこで止まっていたら前に行かないが、やはり動くことによって化学変化も起こしますし、今三つがいい結果になっているのだなと思います。福祉の関係で言えば、今、障害者の方ですが、高齢者の方の

福祉も巻き込まれるところはあるのかなという気もします。皆さん、すべて市民が農業に携わっている方ばかりではないので、そうではない方の何かお手伝いができるような、今、人生100年時代と言われる時代で、70でも、80でも、何らかのことができる、そういうような切り口もあるのかなという気がいたしました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。なかなかむずかしい話ですが、続けて竹島先生、次に畠山さんからコメントをいただきたいと思います。

○竹島（コメンテーター） 連携のところは、多分、それぞれ地域が向き合っている課題を構成員の方、運営に携わる方が察知して、次はこれをやらなければいけないのだと、和氣さんの気づきや行動の早さによるのかもしれないのですが、それを一緒に取り組んでいる集団のメンバーがちゃんと共有して、違和感なく、同じ方向を向いてちゃんとやるのだという土台ができているのが連携の根っこにあるのじゃないかなと。また、なぜそういう土台ができるのかということだと、愛媛県の社会教育の熱心さを冒頭でも言いましたが、多分、内子町の「からり」もなんですが、出荷者の方たちが協議会とか、株主になったりして、そういう組織に単なる出荷者としてではなく、運営参画、自分たちの意見も言って、組織を回していくところに携わるのに、特に南予の人たちはハードルがない方だと思っています。それというのは、自治会の延長の地域づくり活動センターとか、町内会とか、もしかすると、これから農村RMOになっていくような、農家だけでなく、非農家も含めて住民そのものが地域の集まりの中で構築していった地域の中での振る舞い方というのかわかりませんが、地域のことを知って、地域のことに対して自分の立場で発言するという意思決定や行動方針のとり方がベースにあって、「百姓百品」ではこういった形でうまく成果になっているのではないかなと思います。なので、旗振れども踊らないところはもちろん踊らないのですが、多分、西予市は、そういうのにすごく乗ってくれる地域なのではないかなと勝手に思っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。畠山さん、よろしくお願ひします。

○畠山（コメンテーター） つなぐという面で言うと、今日の話聞いてこれかなと思ったのは、地域の孫世代をうまく使っていることですね。井上さんが販路を探しに出たことによって何倍も売上が伸びた。それに気づいた和氣会長は完全に彼女に任すわけですね。お年寄りが口出しをしない。若い人たちが動き出す。農産物の直売所のほうに物が足りなくなったときとか、人気商品がある場合についても、やはり地元出身の福井さ

んという若い女性ですが、「おじいちゃん、これ作ってよ」というふうに回るわけですよ。そういう孫世代が言ってくると、おじいちゃん、うれしくなりますよね。「じゃ、おれも作ってみるかな」と。それが意外に功を奏する。そんな孫世代の人は大勢いなくていいのですが、ちょっとしたキーになる孫世代をうまく使うといろんな仕事が連携して回る。これが野村の現状ではないかなと思いました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。孫世代ということですが、畠山さんのコメントに付け加えるとすれば、孫世代といっても井上さんは旭川出身ですよ。その点がすごいなと思って。おじいちゃんたちも自分の本当の孫だったら、ニコニコしながら後を継がせるところだと思うのですが、よそ者に継がせる、こういったことができれば、若い人たちの力をどんどん外から入れられると思います。しかし、農村ではそうでもないところが多くて、「風通しの良さ」はやはり「百姓百品グループ」が成功した秘密の一つだと思っています。

さて、お約束している時間が過ぎてしまったところですが、せっかくですから、このあたりで会場からもご意見、ご質問等を賜りたいと思います。皆さん、ちょっとだけ延長をお許してください。会場から何かご質問とか、ご意見、どうぞ、お名前をおっしゃってから。

○会場 愛媛大学元農学部教授の村田と申します。「百姓百品」さんが誕生して、その後、私、九州大学から愛媛大学農学部に移任して、こんな組織があるのだと。簡単にポイントだけお話ししたいのですが、まず県の担当の方、よく「百姓百品」さんを推薦してくれたなどお礼を申したい。そして、全体の審査会でよく天皇杯まで出してくれるなど。先ほど管家市長が紹介された明浜の「無茶々園」さんは40年。しかも、基幹産地。明浜のミカン、柑橘という地域農業の基幹作物で、有機栽培で全国に知られる組織になってようやく天皇杯をいただいたのです。今回の「百姓百品」さんはまだ20年、最初からいて、ようやく四半世紀、1世代のところ。しかも、基幹農業じゃないのですよ。農協に出荷する基幹的な経営ではなくて、地域に定住している小規模、高齢農家、地域の住民の底辺を農業で支えるという運動ですね。よくこれを天皇杯に出してくれたなど私は驚いているのですが、

「地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸「百姓百品」」、これはだれがつけたのかなと、すごいのですが、私はもう一つ、農山漁村定住者の底辺を農業で支える。この取組は農協からは喜ばれているのですよ。農協共販では出荷できない人を支えてくれる。しかも、その大半は西予の野村地域はかつて兼業機会もそんなにたくさんありませんでしたから、高齢者の大半は六、七万円の老齢年金しかないのですよ。本当、現代の

貧困日本、農村における高齢者の貧困が集積しているところを、400人も自分の好きな野菜を作って、しかも、竹島さんが先ほど言われたが、どこに出荷するか、それを自分で指示できる。なぜかといったら、自分の産品に消費者が電話をかけてくれるのですよ。生協の産直とは違って、インショップ展開は、直接、消費者と顔見知り関係になるという、これが高齢生産者にとっては励みなんですよ。そして、何万円か、とんでもない、100万円を超える人が40戸を超えている、そういう地域の底辺の所得を支えるという活動と、障害者、引きこもりの人たちに地域社会での居場所を提供する、こういう点。

25年たって、1世代たって、いいところで表彰してくれたなど。転換期が来ました。もう青ネギは増やせません。草取りでお手あげです。高齢化していくばかりですからね。若い世代がどんどん世代交代できるわけではない。見事なのは、トップを県外の若手に引き継いだという点。これは県外から来られた人はわかりにくいのですが、愛媛県民の県民性があります。怒られますが、愛媛県民の県民性は基本的に石橋をたたいて渡ればいいのですが、渡らないのです。それを突破してくれるのですよ、県外の人たちが。そしていいのは、県外の人たちが自由にやりたいことを、どうぞやってくださいと任せる。今回、そうですね。和氣会長が旭川出身の井上さんに、井上さんもよくこんなところに来たねと思うのですが、ポンと渡す。ほかの3人の会社の社長も若い女性になっていって、トップは世代交代できたのだが、実際の担い手はそう簡単に世代交代できるわけではないということで転機が来ました。欠けているものは何かということですね。聞いていて、オーガニックという言葉が全く出てこないでしょう。なぜか。私は東本店を利用しているのだが、消費者は顔が見えるから、「あなたは自分が食べる野菜を出しているよね」と。大模生産者ではありませんから、安心して食べられる。そういうこともあるし、それからやはり本格的にこれからはコスト低減を狙わなければなりません。ネギを出すための保冷庫の電力代が月に15万円もかかっている。なぜ早くソーラーをやらないのかと。そして新たにソーラーも屋根に貼るだけでなく、ソーラーシェアリングをやって、ブルーベリー、ブラックベリーをやったらと提案しているのです。

そこで、市長さんをお願い。管家市長さん、今後の西予市農業、野村は先ほどもあったように四国一の酪農と肉牛繁殖地帯ですよ。県内の半分の酪農経営があるのです。ところが、特にコロナ禍の影響の中で、10年前は100軒あった酪農家が37戸まで減っているのですよ。大野ヶ原は12戸もあったのが4戸まで減ってしまっただけで壊滅状態になってきた。これをどうするかといったら、今、国が「みどりの農業システム戦略」で、オーガニック化で農

業は生き残ろうという提案をしています。オーガニックビレッジ宣言都市に、ぜひとも市長、応募していただいて、地域農業をオーガニックに転換していく中で、この「百姓百品」の生き残りの道も探るべきだと。長くなってしまって申し訳ありません。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。褒められているのか、怒られているのかわからなくなりましたが、今、ご指摘いただいたことなども次の課題につながっていくと思います。これからどうしていくのかという点について、一言ずつコメントいただいて、お開きにしたいと思います。

○和氣（業績発表者） 西予市内には四つの農業法人があります。明浜の「無茶々園」と「百姓百品」と城川の「城川ファクトリー」と「味彩」。昨日、私が「みんなどういう思いでやりおるんぞ」と電話して聞いたのですが、私と大体同じで、いわゆる人口が大都市にどんどん向かっていきますね。その供給源は田舎です。これからも恐らくそれは続くだろうと思います。しかし、それだけでなく、恐らく私は消滅する集落とかも出てくると思うのです。最後の集落を守っていくのは農業法人だと思います。それぞれの農家が年を取られて、トラクターも運転できない。じゃ、畑をどうするかといったときに、城川ファクトリーさんは栗を植えて、働ける間はそこに来てもらって、栗を育ててもらおう。当然、報酬を払う。販売はファクトリーでやるという形を取っておられます。味彩さんはそれがゆずです。かなりな面積にゆずを植えられて地域の農地ができております。われわれはいろんな野菜を作るなり、ネギを作ったりして、地域の農地を保全している。明浜はもちろんミカンですね。いわゆる畑に何もなくなったら、出てくるのはやはりイノシシとか、そういうことになります。荒れると、そこには害虫が発生し、野村でも太田という住宅のすぐ隣に耕作放棄地がありまして、それを私が見つけて、国のほうに何とかしてくれと言ったら、ちょうど私が言った年から中間管理機構が無料でやってくれることになりまして、それが元の優良農地に返ってきて来年から使えることになりました。そういうことをやっていないと、どんどんそれが進んでいくのです。荒れるところは広がるのです。ずっと見ておったら横に広がっていきます。ですから、できるだけ耕作放棄地をなくして優良農地に変えていく。そこで少しでも生産をして地域を支えるということをやっていかなければいけない。それをやっているのが今の農業法人だと思います。個人では将来絶対になくなっていくと思いますので、お互いの社長とも話したのですが、われわれは地域の農業を維持するためにやりおるのじゃなということを確認して今日ここに参りましたので、一応、そのことを言っておきたいと思います。

○福与（コーディネーター） オーガニックとか、ソーラーとか、「環境にやさしい」という方向に舵を切らなくて良いのかと、会場からご指摘があったと思いますが。

○和氣（業績発表者） それは次の人がやるでしょう。

○福与（コーディネーター） 管家市長、今後の展望、あるいは市からのアドバイスなど、コメントをいただきたいと思います。

○管家（コメンテーター） 先ほど村田先生がみどりのシステムのオーガニックビレッジシティ宣言をして頑張れよと励ましをいただきましてありがとうございました。研究させていただきたいと思います。先生が言われたように、酪農の方はコロナのことで、今の飼料とか、いろんなものが高騰で離農される方が結構おられます。市としてもその対策として支援できるものは支援しているのですが、それでもなかなか追いつかないというのが現状であります。

それと、耕作放棄地、これはミカンもそうですし、内陸の水田もそうですし、城川の栗のところも、なかなかよう作らないという方が多いので、市としてはやはりそういう農地をある程度集約化する部分と、それと、今「百姓百品」さんがやっていたような、残っていただいている高齢者の方を含めて頑張っていただける、そういう支援ということもあわせて考えていきたいと思いますし、担い手の皆さんに対する支援も今やっているところです。私たち、食というのは基本ですから、農林水産、林業もあわせてですが、育てていきたいし、支援をしていきたいと思っています。ありがとうございました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。次は、竹島先生からよろしく願いします。

○竹島（コメンテーター） 一応、懸念点として言っておかなければと思って準備していたのが、「百姓百品」の出荷者の方たちが多分これから高齢化でリタイヤをされる方たちも多かろうと思いますので、新たな開拓ができないかなと思っています。ほかの直売所なり、道の駅でも、結構、出荷者の確保のために、魅力的な売り場作りとか、出荷者の支援とかをすることで出荷者を募ってはいるのですが、もうそろそろというか、すでに出荷者の取り合いが始まっているのではないかと感じております。農業就労人口そのものの減少は、すでにどうにもできない状況になっているのかもしれないのですが、やれることはやっていたいかなければならないというのが私自身の立場でもあります。

ちょっと法律の話をしてしますと、農業経営基盤強化促進法という法律があるのですが、それは認定農業者を農業の担い手として育成していきましようねという法律でやっていたわ

けですが、最近の改正で農業を担う者として認定農業者以外にももう少し規模の小さい人だったり、雇用されて農業に従事している人たちも含めて多様な担う者というものを政策的に位置づけようというふうにだんだん気運が変わってきました。今回、出荷者として登録されている方は、多分、農水省が取っている農業センサスではあまり統計として出てこないような規模の出荷者の方たちも多いのではないかなと思います。ですが、こういった「百姓百品」さんのような取組の中では、統計で出てこないような方々もしっかり生産者として加わっていて、消費者によいものを届けてやりがいを感じて継続をされている。そういったところに共感を得て、半農半Xと言ってしまうと、簡単な言い方になってしまいますが、そういった生き方に魅力があるんだといろんな人を幅広くうまく周知してもらえるとよいのかなと思います。実際のところ、私も「百姓百品」をスーパーで見かけても余りイメージがわかなくなったりもしたので、消費者という立場を入り口にして、出荷者の開拓をいろんな形で進めていけるといいのではないのでしょうか。

以上です。改めて、本日はお話を聞くことができよかったです。ありがとうございます。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。畠山委員、よろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター） 和氣会長も感じていらっしゃるように、競走相手はどんどん出てきますよね。ネギだって、当然、コストでどういうふうに対抗していくかということで、この農業法人を守っていかなければいけないと思うのです。今日の話聞いていて一つヒントがあるなと思ったのは、井上さんが小さな会社だからこそいろいろな問題点をみんなですぐ共有できるとおっしゃいましたよね。あれはすごく大切なことだと思いました。かつて、日用品メーカーの「月のマークの花王」を取材したことがあったのです。あそこは景気が悪くなくても、経常利益はずっと伸びていた。その秘密は何か聞きに行ったら、お客様のクレームに真摯に対応するという姿勢なのですね。エコシステムというシステムがあって、クレームが入ってきたら、そのクレームを全社員が一瞬にして見ることができるシステムが構築されていました。その後です。クレームによって改良した商品を、クレームを言ってきた人に送るのです。そうすると、どうなりますか。送られた人間は「私の一言で商品が変わった」という口コミが広がりますよね。これがものすごく消費者の力を結びつけるのですよね。「一村一品」でずっとやってきた野村の試みは生産者の心はがっちりつかんでいます。あと、消費者の部分はどうやって取り逃がさないかという部分では、小さな会社なりの工夫をそういった面でもぜひ活かしていただきたいなというふう

思いました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。私から簡単に総括させていただきます。やはり「百姓百品グループ」の活動は、高齢者、若者、障害者といった多様な主体が、それぞれ居場所を見つけて、誇りも持って働ける仕組みを築き上げていること。販売、生産、福祉の三つの組織が連携して、一つ一つは困難な課題であっても、連携していけば解決できる仕組みを構築していること。その連携のハブに農業があることが、農林水産祭の天皇杯にふさわしい事例であると、今日お話を聞いて、改めて思っているところです。大分時間を過ぎてしまいましたが、パネルディスカッションをここで閉じさせていただきます。最後までご静聴いただき、ありがとうございます。（拍手）

○司会 演壇の皆様、長時間にわたりまして、意見交換、ありがとうございます。会場の皆様、またオンラインの方々も熱心に聞いていただきまして誠にありがとうございました。以上をもちまして、シンポジウムを終了いたします。

なお、本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を私ども農林漁業振興会のホームページにアップいたしますので、今後の参考にしていただければ幸いです。

なお、お帰り際には、お配りしておりますアンケート用紙にご記入の上、入り口にお渡し下さい。オンライン参加の方々は、ズーム会議から退室されますと、自動的にアンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答いただくよう重ねてお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。

（閉会）

令和5年度（第62回）農林水産祭
（第36回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸「百姓百品」）

発行 令和6年4月

編集・発行 **公益財団法人 日本農林漁業振興会**

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03) - 6441-0791 (代)

FAX (03) - 6441-0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。

